惨苦の始まり

　明石愁はチューリップになった。そして私は庭師になった。
「はい愁、あーんして」
　私はコンビニで買ってきたピザまんを小さく割って、愁の顔の前に差し出した。
「あー」
「食べて食べて。ピザまん好きでしょ？」
「……」
「私が食べちゃうよ？」
「んー」
　愁は鼻水を垂らして口をぽかんと開けている。こんなアホ面見たくないけど、きっと永遠に見なきゃいけないんだろう。いやこの顔を拝むのは今日にでも終わりに出来るんだけど、私はそんな事が出来るほど長く生きてないし、理性で生きられるほどまともな脳みそは持ってない。
　なにより、私は死ぬまで愁の彼女でありたいと思っている。
　でも愁は私のカバンについている熊のキーホルダーばかり見ていて、私の顔なんて見てくれない。
　愁はチューリップだけどチューリップのように優しくない。花は大切に育ててあげればいつかは素晴らしい花を咲かせてくれるけど、愁はキスをしても何をしてもあーとかうーとか唸るだけ。彼に触れれば触れるほど、私の愛情が伝わる事はないという事実が脳みそに突き刺さる。
「ねぇ愁。私の名前呼んで」
「……」
「呼んでよ」
「くま……」
「ぶっ殺していい？」
　愁は相変わらず熊のキーホルダーを凝視している。どうして目の前に私がいるのに私を見てくれないの。まさか熊のキーホルダーに嫉妬する日が来るとは思わなかった。
「これがどうかした？」
「……」
「ねぇ。この熊さんはね、愁がくれたものなんだよ。覚えてる？」
　無言。そして首を横に振る。チューリップに思い出を求めるのは酷な話か。
　私はわざとらしいため息をついて、スカートのポケットからメモ帳を取り出した。そして一ページ破って「椎本　香奈実」と書いて愁に渡した。
「ほら、これ私の名前。椎本香奈実だよ。オーケー？」
「あー」
　これで愁にメモ用紙を渡すのは何度目だろうか。こいつはとにかく物忘れが激しくて、一週間に四回くらいは何かを忘れていた。だから私はいつも時間割とかデートの待ち合わせの日時をメモ用紙に書いて愁に渡していたのだ。それでもメモ用紙をもらった事すら忘れてデートをすっぽかす事が何度もあったから、記憶力に関しては生まれつきチューリップだったのかもしれないけど。
「ねぇ、誕生日にあげたメモ帳、まだちゃんと持ってる？　捨てたり無くしたりしてないでしょうね？」
　無言。私は愁の頬を軽くビンタした。
「私の話聞いてる？」
「あー」
「だからメモ帳だってば。ちゃんと大切に使ってる？　どうなの？」
「んー……」
　愁はゆっくりと目を閉じて居眠りを始めてしまった。
　イラっとした。

心の底からイラっとした。
どこにもぶつける事のできない虚しさ、悲しさ、苦しみに腹が立った。そしてこの苛立ちから逃げる方法は一つだけ。愁を忘れること。
本当にイライラする。私はたまに、目の前にいる愁を十時間くらいかけてなぶり殺したくなる時がある。
ふと小さい時の事を思い出した。私は親にねだって喋る猫のぬいぐるみを買ってもらった。中に電池が入っていて、背中についているボタンを押すたびに猫がにゃーとたいして可愛くない声をあげるんだけど、私はとにかくそのぬいぐるみが気に入っていて、毎日にゃーにゃー言わせて遊んでた。
そんなある日、私は猫のぬいぐるみをぶっ壊した。ぬいぐるみは全体的にふわふわで柔らかいんだけど、背中に取り付けられている電池カバーの周辺だけ固かった。多分内部に機械が入っていたからだろう。私はその固さに惹かれて、電池カバーの周辺からぬいぐるみの生地を切り裂き、ボロボロにして、最後には無残になった猫のぬいぐるみの姿を見て一日中泣き叫んだ。
今の私は、猫のぬいぐるみを壊した昔の私によく似ている。
「ねぇ、寝ないでよ。私と遊ぼうよ」
「……」
私は愁の腹にエルボーを喰らわせて病室を飛び出した。そしてカバンから熊のキーホルダーを外して、廊下に置いてあるゴミ箱に放り投げた。
「私よりも熊さんが大事なのかー！」
むかつく。そんなに熊が好きなら毎日サクラマスでも食ってろよ。
苛立ちがおさまらずにゴミ箱を蹴飛ばしてストレス発散してたら、遠くから若い看護師がゆっくりと歩いてきていた。毎日のように病院に来てるから看護師はほとんどが顔見知りだ。この看護師はよく愁の世話をしている。
看護師は廊下に散らばったゴミを見下ろしてため息をついた。
「明石さんの彼女の……。椎本さんですよね。どうしたのよそんなに暴れて」
「情緒不安定です」
「ねぇ、あなた。もう来なくていいわよ」
「今からモップを持ってきます」
「だってさ、ねぇ？」
「教室の掃除は誰よりも早いです」
「むなしくならない？」
「掃除は義務です」
「植物人間に会うのは義務なの？」
「は？」
「だからさ、むなしいでしょ。植物相手に話かけるなんて。ましてや愛情を求めるなんて。もう来るのやめた方がいいわよ。見てる方が痛々しいし」
「痛みのない人生なんてありません」
「でもね、報われないでしょう？　彼に会い続けても……」
私は看護師のむなぐらを掴んだ。
「私は報われるために生きてる訳じゃありません。本能で生きてるんです。放っといてくれませんか？」
看護師は私の手を振り払うと、スタスタと立ち去っていった。去り際に「若いわね」とか呟きやがったから、ゴミ箱を背中に投げつけてやった。

私はボロボロのママチャリで琴似の街を疾走していた。香連高校の生徒、サラリーマン、主婦、カップル。色んな人達が色んな表情をして歩いている。人間の波の中を切り裂いて走るのはいつだって最高な気分になれる。
「……なんだあれ」
JR琴似駅の目の前にあるビルの周りにバリケードが置かれていて、何人もの警察官がうろうろしていた。バリケードの前には野次馬が詰め寄せていた。
私はげんなりした。誰か屋上から飛び降りて死んだのかな。

いつもの日常だ。
野次馬なんて大嫌いだから無視して通り抜けようとしたけど、人の群れの中に十八軒高校の女子生徒が沢山いる事に気がついて、私は群れに近づいた。十八軒高校には知り合いが何人かいるのだ。
群れの中に知った顔を見つけた。中学の時クラスメートだった女。
「なんかあったの？」
「うわあ！　……ってもしかして明日菜！？　ひ、久しぶりだね……」
こいつの名前なんだったかなと思いながら、私はもう一度質問した。
「ねぇ、何があったのさ？」
「え、何ってその……」
「自殺？」
女の顔は真っ赤で興奮しているみたいだった。首を何度も縦に振った。
「そうだよ。なんかね、十八軒の制服着た女の子がビルから飛び降りたんだってさ」
「誰？」
「宿木優奈っていう子らしいよ。私は話した事ないけど……」
「……あ？」
「え、なに。もしかして知り合い？」
心臓の鼓動が一気に早くなった。
宿木優奈。彼女は昔からの友達だ。
「優奈が……？」
「う、うん。さっき病院に運ばれたけど……」
私はビルを見上げた。三十階くらいはありそうな大きなビルだ。この高さから落ちたら百パーセント死ぬだろう。
私はしばらく、その場から動けなかった。
宿木優奈が自殺した。
しかも白昼堂々、こんな街のど真ん中のビルから飛び降りて……。
私の脳みそはもう何も考える事が出来なくなっていた。

夜の琴似の公園で、私は田中啓太と対峙していた。
先日、宿木優奈が自殺した。優奈は昔からの友達で、今でもたまに連絡を取り合っていた。そして知り合いから聞いた話だと、優奈は田中啓太をリーダーとするグループの一員だったらしい。それはおかしな話なのだ。
田中啓太は不良で、人をいじめるのが趣味みたいな奴だ。でも優奈は決して不良とつるむような奴じゃないしいじめが趣味でもない。だから優奈が田中啓太と仲良くしていたなんてとてもじゃないけど信じられない。
優奈は田中達と仲良くしていたのではなく、いじめられていたのではないか。そんな飛躍した憶測が私の頭の中に浮かび上がったのだ。周りから見たら仲良くしているように見えても、裏ではコソコソいじめられている。そんな事はよくある話だ。
「私はね、優奈がアンタと仲良くしてたって話が信じられないんだ。もう一回聞くよ。アンタは優奈の事をいじめてたの？」
「だからいじめてないって！　何回言ったら分かるんだよ！」
「じゃあなんで優奈は死んだのさ！」
「だーかーら！　遺書も何もなかったんだから、優奈がなんで死んだかなんて分かる訳ねーじゃん！　そんなに死んだ理由知りたかったらお前も死んであの世に行って優奈に聞いてこいよ！」
「よくそんな事言えるね？　アンタって顔も脳みそも奇形なの？」
「あ？」
「分かりやすく言ってあげようか？　顔はブスで頭ん中には脳みそのかわりに犬のクソでも入ってるのって聞いてるの」
「いい度胸してるね、藤袴」
「あーうんやめてそういうくっさいセリフ。鳥肌立つわ」
田中は深い溜息をついた。

「だからさー。いじめてないものはいじめてないんだって。なんで俺をそんなに疑うの？　つーかさ、よく証拠もなしにそこまで言えるよな。失礼ってレベルじゃねーよ」
「アンタ、これまでいじめてきた奴の人数言える？」
　田中は腹を抱えて笑った。
「二十人か三十人はいじめてきたかな。詳しい人数なんて覚えてねぇ」
「今も色んな人をいじめてる？」
「うん。でも優奈の事はいじめてなかったよ」
　こいつとは高校が違うから詳しい事は分からないけど、やっぱり田中が優奈をいじめていて、いじめに耐えられなくて優奈は自殺した。という疑念はどうしても拭えなかった。
「アンタの言うことなんて信用できない」
　田中は吹き出した。
「あのさ、お前マジでいい加減にしろよ。いくら友達が自殺して悲しいからってさ、証拠も根拠も無しに人を疑うのってどうかと思うよ？　とにかく俺は優奈をいじめてない。だから優奈が自殺した理由は分からない。なぁ、もう帰っていい？」
「優奈とつるんでたのに、優奈が自殺した理由に心当たりが無いの？」
「知らねぇよ。俺の知らない誰かにいじめられてたんじゃないのか」
「人を自殺に追い込むような人間なんてアンタくらいのもんだよ」
「お前バカじゃないの？　いいか、教えてやる。世の中ってのはな、人間は自分よりも弱い動物を食う。人間より弱い動物は自分より弱い動物を食う。そういう風に出来てるんだ。つまり、優奈より強い奴らは誰でも優奈を食えるんだ。俺らのまわりに優奈をいじめていた可能性のある奴らは腐るほどいるぜ」
「道徳と食物連鎖を一緒にすんな」
「まぁ聞けよ。その食物連鎖だけどな、トップは人間だ。基本的に人間は誰にも食われる事がない。つまり王様だ。そして俺はそういう人間になりたい」
「残念ね。この近くには整骨院しかないのよ」
「つまりね、俺みたいに王様になりたいと思っている奴は沢山いるわけ。だから俺だけを疑うのはおかしいよ。他の奴らの事ももっと疑え」
　大声で喋る田中の口の中に、隙間だらけの歯が見えて吐き気がした。
「ていうか由梨絵ちゃんさー。正義気取るのやめたら？　あのさ、死んだ奴に意思とか気持ちなんてないの。お前が優奈のために正義を見せたって、お前の気持ちは優奈に届かないんだよ。お前のやってる事は全て無駄なの」
　私は両手の拳を握りしめた。
　なんでだろう。
　なんで、何も言い返せないんだろう。
「お前は今ね、葬式をしてるんだ」
「葬式？」
「そうだよ。葬式ってさ、いくら会場を綺麗な花で飾ろうが大勢の人間が皆で涙を流そうが何をしようが、生きてる人間の気持ちは死んだ奴には届かない。死んだ奴が自分の葬式会場に飾られた綺麗な花とか坊主のお経を聞ける訳じゃない。じゃあなんで葬式なんてやるのか？　答えは簡単だ。葬式は生きてる人間のためにやるからだ」
　やっぱり何も言い返せない。唇をかみしめる事しかできない。
「生きてる人間は死者を思い悲しむ。悲しすぎて前に進めない。でも葬式でもやれば少しは心が鎮まる。心を整理できる。身近な死を乗り越えて、心が平常になって、そしてまたいつも通りの日常を平和に過ごせるようになる」
「もういい」
「つまりね、藤袴。お前は優奈のために暴れて正義を見せつける事で、自分の心を落ち着けて日常を取り戻したいんだよ。だから根拠なんて全くないのに俺に突っかかってるんだろ？　なぁ本当のこと言えよ。お前さ、本当は優奈の事なんてどうでもいいんだろ？」
　夏のどんよりした空気の中で、私は田中を突き飛ばす事しか出来なかった。

　愁は今年の春に交通事故にあって植物人間になった。愁を轢いたドライバーは未だに見つかってない。そして夏。ていうか一週間前、近所の高校の女の子が屋上から飛び降りて自殺した。ワイドショーではここぞとばかりに芸能人やコメンテーターが家庭環境がどうだとか命の大切さがどうだとかどうして彼女は大人に相談しなかったんだとか、聞いてるだけでテレビ局を爆破させてやりたくなるような会話をひたすらに続けている。まさに狂気だ。
　死んだのは宿木優奈という子で、明日菜ちゃんと由梨絵ちゃんと同じ十八軒小学校だったらしい。ちなみに愁も十八軒小学校である。
　明日菜ちゃんと由梨絵ちゃんは同じ香連中学、愁と宿木さんは十八軒中学へ行った。そして香連高校では私と明日菜ちゃんと由梨絵ちゃんと愁が一緒になって、私ら四人は高一、高二、高三と同じクラスになった。宿木さんは十八軒高校に通っていた。
　広くめまぐるしく人間関係が動いているようでいて、実際はとても狭い世界の中で繋がってる。それがとても複雑で、わずらわしい。
　ぼんやりと窓を見つめる。空は真っ青で、雲は少なくて、そして教室はクソ暑くて、じんわりとした夏が体の中に入り込んでくる。
「おい椎本！」
　突然名前を呼ばれて、私は窓から黒板の方に視線を向けた。担任の大山がずかずかと歩み寄ってくる。
　大山は多分四十代前半だと思うんだけど、童顔で顔の形はまんまるとしていて、肌はブツブツでニキビだらけで髪はハゲてて、でかい鼻からは鼻毛が豪快に飛び出している。歩く公然わいせつ罪だ。
「窓ばっかり見てるけど、お前ちゃんと授業聞いてるか？」
「私が授業聞いてないって思ったから怒ってるんでしょう？　先生、会話はもっとスムーズに行いましょう。無駄は無くすべきです」
　大山はヤク中患者でも見るような目付きで睨みつけてきた。よくもここまで憎悪を込めたガン飛ばしをできるもんだ。こいつは授業を聞いていない生徒を相手にしているだけで簡単に自分の目を腐らせる事ができる。きっと自分も世間も何もかもが気に喰わないんだろう。
　大山はひと通りネチネチと嫌味を言うと教卓へ戻っていった。
　そしてチャイムが鳴った。一学期終了。明日から夏休み。
　大山は授業を終えてさっさとホームルームを始めようとしたけど、みんなカバンをかついでさっさと教室から出て行った。大山はしばらくわめいていたけど、やがて諦めて自分も教室から消えていった。
　クラスの中でもダントツにアホな男子たちは、折り畳み傘を開いてちゃんばらごっこを始めた。そしてクラスの中でもダントツに地味な奴らは、携帯ゲーム機を取り出して頭を突き合わせながら、うざったいでけぇ声で楽しそうに喋り始めた。いけ、そこでボムだ！　あー、マジこいつ強すぎ！　お前なんで弓で攻撃してんだよー！　うわやばいやばい！　ダメージ喰らいまくってる！
　私は斧でこいつらを狩り尽くしたい。
　ちゃんばらごっこをしていた男子たちは、やがて丸めた雑巾と傘で野球を始めた。なんてこった。私はどうやら学校じゃなくて動物園に通っていたらしい。
　窓際の席では体重が八百キロはありそうな豚女が二リットルのポカリをがぶ飲みしていた。顔はニキビだらけで肉だらけの頬は垂れ下がり、短い前髪はおでこにくっついている。きっと彼女、いやこの豚は鏡というものがこの世に存在する事を知らないんだろう。
「かーなーみー。かえろ」
　明日菜ちゃんが私の机にどっかりと座り込んできて、ぼりぼりと太ももを掻きながらわざとらしいほどに大きな声で言った。
「このキチガイ共見てたら、こっちまでキチガイになっちゃうよ」
　一瞬ピタリとキチガイ共は沈黙したけど、またすぐに騒ぎ出した。
　私はちらっと由梨絵ちゃんの方を見た。由梨絵ちゃんはぼーっと黒板を眺めてるけど、視線は黒板を突き抜けた向こ

うまで飛んでいるように見えた。
「由梨絵ちゃーん。帰ろう」
　呼びかけると、由梨絵ちゃんは振り返って頷いた。
　明日菜ちゃんも由梨絵ちゃんも宿木優奈とは仲が良かったらしいから、ここ最近の二人は元気がない。もっとも、明日菜ちゃんはピリピリしていて、由梨絵ちゃんはどんより落ち込んでるって感じだけど。
　由梨絵ちゃんが席から立ち上がった瞬間、教室のドアが勢い良く開かれた。乱入者は隣のクラスの女の子だった。奇形が集まっている香連高校の生徒とは思えないほどに可愛い子だから知っている。確か海藤亜梨沙っていう名前だったと思う。右手には丸めた紙を握り締めている。
　海藤さんはツインテールの黒髪をぶんぶん揺らしながらこっちに走り寄ってきた。
「ねぇねぇ。椎本香奈実さんだよね？」
　ツインテールのやたらと舌っ足らずな喋り方が癪に障ったけど、私は笑顔で頷いた。
「そうだよ」
「やばいよ！」
「なにが？」
「やばい！　マジでやばい！　マジで！」
　ツインテールは紙を握りしめたまま、ぴょんぴょん跳ねて右手をぶんぶん振り回しながら何やらわーわー喚いてる。なんだこいつ。
「あのね、あのね、あのね」
「うん、うん、うん」
「なんかね、外でね」
「うんうん」
「変なね、おばさんがね、ビラをね、配っててね」
「貴方も変だけどね。ビラってなに？」
　ツインテールは机の上に紙を置いた。そして、私は絶叫した。
「なにこれ！？」
　紙には愁の顔写真がでかでかと印刷されていて、写真の上には「殺人者　明石　愁」と書かれていた。
　明日菜ちゃんは目をまんまるにして理不尽な紙を奪い取った。
「なんでアンタの彼氏が殺人者なの？　誰を殺したっていうのさ？」
「わ、分かんないよそんな事！」
　由梨絵ちゃんが両手で海藤亜梨沙のツインテールを握った。
「これどこで手に入れたの！？」
「えと、あの、うんと」
「早く言えや！」
　由梨絵ちゃんがツインテールを握った両手を上下左右に動かすので、それにつられて海藤亜梨沙の頭も上下左右に揺れた。
「痛いですハゲますやめてください！」
　ツインテールは泣きそうな顔で言った。
「こ、校門で……。なんか、変なおばさんが配ってた」
「配ってた！？」
「うん、なんか、メガホンで叫びながら配ってた」
　私ら三人はツインテールを突き飛ばして教室を飛び出し、急いで校門へ向かった。

　校門には確かにババアがいた。四十代前半くらいの女があの紙を生徒たちに配りながらメガホンで叫んでいる。
「私の優奈は殺されたんです！　この明石愁に殺されたんです！」
　呆然。
　ただただ、呆然。

こいつは何を言ってるんだろうか。
精神異常者は近くを通った生徒たちにビラを押し付けている。ほとんどの生徒たちは興味津々にビラを見ていた。遠くにはニヤニヤ笑いながらババアを見ている集団が居て、そいつらは携帯でババアの様子を撮影していた。
ババアはついにビラをぶん投げ始めた。ビラがパラパラと宙を舞い、地面に落ちていく。
すぐに明日菜ちゃんが落ちている無数のビラをかき集め、由梨絵ちゃんはビラを受け取った生徒を突き飛ばしてビラを奪い取り、この様子を傍観している集団に突撃して携帯電話を取り上げて地面に叩きつけた。
惨めだった。
その光景は本当にみじめで、理不尽で、なんだか泣きたくなるほど悲しくて、どうにもならない不幸な気持ちが体の底から這い上がってきて、目の奥がじわりじわりと痛んだ。
周りにいる生徒たちは皆けらけら笑いながら二人を見ていた。まるで明日菜ちゃんと由梨絵ちゃんが間違った事をしているかのように、誇らしげで、上から目線の笑いだった。
腹立った。どうして大人のせいで、明日菜ちゃんと由梨絵ちゃんがこんな目に合わなきゃいけないんだ。私の大切な友達が、ひどい目に合わなきゃダメなんだ。
校舎を振り返ると、職員室の窓からセンセイ達がこっちを見ていた。表情は
分からないけど、多分笑ってたと思う。少なくとも止める気は無さそうだ。あいつらは二学期から生徒が一人減るであろう事を期待して、心を踊らせているんだ。
ババアの声が頭に響き渡る。
「うちの子はいじめられるような子じゃないんです！　だから決して、いじめが原因で自殺した訳じゃありません！
そう、優奈は殺されたも同然なんです！　そう！　優奈は明石愁に殺されたんですー！」
意味が分からない。
すっかり頭が冷えてしまった私はこの状況を冷静に整理してみた。まずこのババアは宿木優奈さんの母親だ。で、ババアは娘が自殺してパニックになった。そしていじめが原因で娘が自殺したという事を認めたくない。だから自殺の原因はいじめじゃないんですよーって世間に訴えてる。
ここまではいい。いや良くないんだけどいいって事にしておく。
問題は明石愁。なんで愁が出てくるの？
愁と宿木さんは同じ小学校と中学校。繋がりはある。そしてババアだって、赤の他人をなんの根拠もなく殺人者と決めつけるはずはない。つまり、明石愁が宿木優奈を殺したという妄言が出てしまうような原因があるはずだ。
……マジで？
いや、そんな訳がない。このババアの頭がおかしいだけなんだ！
私は怒りを抑える事が出来ずに、ババアの背中を突き飛ばした。
「おい！　愁が殺人者とかふざけんなよ！」
ババアは叫び散らした。
「明石愁が優奈を殺したのよ！　絶対にそうなのよ！」
「だからなんでなのさ！　理由教えろよ理由！」
「絶対に明石愁が悪いのよー！」
「意味わかんねぇよ！　愁が人を殺す訳ねぇだろ！」
「香奈実！」
明日菜ちゃんがいきなり私の首根っこを掴んでずるずると引っ張り始めた。私は引きずられながら時が止まるような思いをしていた。
ババアがジーパンのポケットからナイフを取り出していたのだ。しわしわで張りのない顔にニヤニヤした笑みを浮かべながら、ナイフを胸の前でちらつかせている。
イカれてる。こいつは足の爪から脳天まで完全にイカれてる。きっと一日に百トン分くらいの麻薬をやっちまったんだろう。

二人に引っ張られて、私はコロポックル・コタンという喫茶店に連れて行かれた。
ここは琴似の外れにある木造建築の喫茶店で、カウンターも椅子もテーブルも全てが木で出来ている。店の中央に

はドーナツ状のカウンターがあって、輪っかの中ではマスターがコップを洗っていた。カウンターの両端にはJBLの青色のスピーカーが置いてあり、小さな音量で村下孝蔵の初恋が流れている。
　私らは店の一番奥の席に陣取った。すぐに大和撫子のような美人なウェイトレスが注文を取りにきた。
「いらっしゃいませー。ご注文はー？」
　私はカフェモカ、明日菜ちゃんはオリジナルブレンド、由梨絵ちゃんはコロンビアスプレモを注文した。
　ウェイトレスが去ってから私達は黙りこくっていた。頭の中で混乱と怒りが戦っていて思考回路がショートしていて、自分が暴れたいのか泣きたいのかすら分からなかった。
　やがてウェイトレスがコーヒーを持ってきて、無造作にテーブルの上に置いた。
「いまフェアとかやっててー。ケーキが二割引きなんだよねー。マジですごいでしょー。って事でケーキいかがっすかー」
「いや、いらないっす」
　と、明日菜ちゃんが拒否したけどウェイトレスは引き下がらなかった。
「じゃあこの私、千瀬奈々特製のケーキはどうっすかー」
　私が首を横に振ると、ウェイトレスは「あいよー」とか言ってカウンターに引き下がっていった。
　私は甘いカフェモカを一口飲んで気持ちを落ち着かせて、頭の中で色々な事を考え始めた。
　回収したビラは私が預かった。帰ったらシュレッダーで粉々にするつもりだ。でもそれは無意味。ババアは何枚でもコピーを作るに決まってるし、自分の命が尽きるか優奈ちゃんが生き返らない限り、ビラ配りはやめないだろう。
　どうしたらいいのか。
　ていうか、何がどうなっているのか。
　由梨絵ちゃんがやっとコーヒーを一口だけ飲むと、静かに言った。
「あのババアの脳みそは、きっと直径三センチくらいしか無いんだろうね」
「そりゃそうだろ」
　と、明日菜ちゃんが拳でテーブルを叩いた。そしてコーヒーを一気に半分くらい飲むと、私と由梨絵ちゃんを交互に見てから喋り始めた。
「どうしてあのキチガイは明石愁が宿木優奈を殺したんだと騒いでいるのか。その理由は知るべきだ。でもキチガイってのは日本語が通じない。しかもあいつの場合、下手に接触したらナイフでぶすっと刺してきそうだ。私はまだ死にたくない」
「私もあのババアに接触するのは避けたい所だね。でもビラの事もそうだけど、優奈が自殺した理由は絶対に知りたい」
　由梨絵ちゃんは長いもみあげをいじりながら何か考え始めた。やがて前髪をくりくりといじり、眉間に皺を寄せて指で鼻の頭を押さえ、そしてパチーンと指を鳴らした。
「優奈って妹いたよね」
　それは初耳だ。
「そうだ、そうそう。玲菜だよ玲菜。あいつにちょっと話聞いてみようよ」
　明日菜ちゃんは笑顔で何度も拳でテーブルを叩いた。そのうちこのテーブルには穴があくだろう。
　という事で、私達は宿木玲菜さんに会いに行く事に決めた。

　蒸し暑く生ぬるくじめじめとした空気が漂う住宅地をひたすら歩く。天気も人間も何もかもがクソったれで、おまけに頭の中もぐちゃぐちゃで、まるでハエが飛び交う公衆トイレの便器の中で過ごしているような気持ちになる。
　汚い発寒川沿いに宿木家が住む一軒家があった。由梨絵ちゃんはドアノブに手をかけたけど開かなかった。
　次に明日菜ちゃんがインターホンを四十回くらい連打したけど反応は無し。
「ねぇ由梨絵。玲菜のアドレス知らないの？」
　由梨絵ちゃんは大げさに両手を広げた。
「知らん」
　私達はうなった。ここで待ってればいずれ玲菜ちゃんは帰ってくるだろうけど、なんとなくのん気に待っている気分でもなかった。

　それに、玲菜ちゃんより先にあのキチガイが戻ってきたら困る。私はまだ殺人者にはなりたくない。
「そうだ、中学校行ってみよう。十八軒中学」
　明日菜ちゃんが「名案でしょ！」って感じの笑みを浮かべて言った時、背後から声をかけられた。
「あのー」
　振り返ると、そこにはさっきのツインテールが居た。
「なにアンタ、ストーカー？」
　私が質問すると、ツインテールは宿木家の隣の家を指さした。表札には「海藤」と書いてある。
「そこ、私の家なんです」
　明日菜ちゃんが訝しげな顔をしながら玲菜ちゃんに聞いた。
「お前、玲菜の知り合いか？」
「優奈ちゃんと玲菜ちゃんとは昔からの友達です」
「玲菜は今どうしてんの？」
「玲菜ちゃん、旅に出たんです」
「ああん？」
　明日菜ちゃんが素っ頓狂な声をあげた。
「お前それどういう事？　旅ってなに？　どこ行ったの？」
「優奈ちゃんが死んでから行方不明になったんです。中学校にも行ってないみたいだし……。それにね私、二人のお母さん……。さっきビラ配ってたちょっと狂った人ね。あの人に聞いてみたらそうそう玲菜居なくなっちゃったのうふふふーとか言ってました」
　私らは顔を見合わせた。由梨絵ちゃんが呟いた。
「それって……」
　その後に続く言葉は聞かなくても分かる。私は背筋が凍るような感覚を覚えた。
　明日菜ちゃんはツインテールの胸ぐらをつかんで、玲菜ちゃんがどこに行ったのか問い詰めたけど、ツインテールは何も知らないらしかった。
　由梨絵ちゃんが言うには、優奈ちゃんはいじめられていた可能性が高いらしい。その話を信じるなら自殺の原因はいじめ。そしてあの謎のビラと玲菜ちゃんの失踪。
　なにこれ。
　意味分かんない。
　ただ少なくとも、自殺。ビラ。失踪。この三つは必ず繋がっているだろうし、私達はこのまま黙ってる訳にはいかない。全てを知る必要がある。ていうか、知りたい。
　なにより、愁が殺人者呼ばわりされているのに黙ってなんかいられない。裏で何が起きてるのか絶対に突き止めてやる。
「明日菜ちゃん、由梨絵ちゃん。玲菜ちゃんの事、探そう。玲菜ちゃんに話を聞けば優奈ちゃんの自殺の理由も、あのババアがあんなビラを配りだした理由も、全部分かるかもしれない」
　由梨絵ちゃんは小さく笑った。
「言われなくてもそのつもりだよ」
　遠くからセミの声。ぬるい風。肌にへばりつくワイシャツ。
　おでこから汗が流れてきて、どんより、蒸し暑く、気だるい夏の空気が、よりいっそう心の中にじわじわと湧き上がる恐怖をふくらませた。
　宿木優奈の死。宿木玲菜の失踪。あのビラの真意。
　調べる事は山ほどありそうだ。

翌日。夏休み一日目。
私は宿題のプリントをビリビリに破いてゴミ箱に捨てた。身の回りで罪のない人間が植物人間になったり死んだり行方不明になっているのにも関わらず、私に課せられている物事は宿題と将来に希望を抱く子供を演じる事だけ。冗談じゃない。
私はラークを口にくわえながら窓を開けた。クソ暑い。玲菜ちゃんが行方不明になったのもこの暑さのせいかもしれない。
気に食わない。色んな事が気に食わない。納得がいかない。でも自分に出来る事なんて思いつかないし、そもそも自分に何かが出来ないって事くらいよく分かってる。そのくせ小指だけで崖にぶら下がって惨めにもがいてる。私は政治家に向いているかもしれない。
テーブルに投げ出していた手鏡を手にとって自分の顔を眺めてみた。授業中プリントに落書きをしていた時、数学の平沢という教師に頬を思い切りつかまれて、爪が食い込んで傷がついてしまったのだ。
この傷を見る度に体中の血がざわめいて、今すぐにも平沢の体をナイフで突き刺して貫通させて、頭をかちわって脳みそを時計台の上に飾りたくなる。
もう朝起きてから夜寝るまで、一から百まで気に食わない事しかなくて、心の中に黒いものしかなくて、色んな事にケチをつける自分が嫌になる。いっそマジで神様が居てくれたらいいのになって思う。きっと神様はにっこり笑いながら私の心を真っ白にしてくれるはず。そしたら私は大多数の人間と同じようにニュースを見ても何も感想を抱かないようになるし、疑問を疑問だと思わなくなるし、不正や理不尽な事に関して鈍感になれる。すごい。マジでハッピー。
でも残念ながら、私は無知が嫌いだった。そして私にとって神様とは神武天皇と同じくらいにインチキだった。
タバコを灰皿に押し付けてもみ消した。そろそろ出かけなきゃいけない。
そう、玲菜ちゃんの行方を探すのだ。そして行方を探すためには、手がかりを探さなきゃいけない。
二千十二年の夏は、いつも以上に暗い日々になりそうだ。

私達は地下鉄琴似駅のバスターミナルで落ち合った。昨日ツインテールを明日菜ちゃんの家に連れ込み、夜中まで玲菜ちゃんの情報を聞き出した。
でも大した成果は得られなかった。趣味は映画鑑賞、ネット。好きな食べ物は馬肉。お小遣いは月三千円。二ヶ月前にりぼんを読むのをやめた。最近は色んなお店でパフェを食べるのがブーム。
ツインテールは使えない奴だ。
さしあたり、私達は玲菜ちゃんがよく行っていたパフェのお店に行って聞き込みをする事にしたのだ。
明日菜ちゃんは意気込んで、鼻息あらく豪語した。
「ぜってー玲菜の奴見つけるぞ。私はなんでもかんでも白黒ハッキリしないと気に食わない性分なんだ。あと嘘とかごまかしも嫌いだね。優奈の自殺は絶対に誰かにごまかされてるし、あのババアのビラなんて嘘の塊だ。ちきしょう」
ちょっとだけむなしくなった。私達が玲菜ちゃんを探しだして、全ての真相を突き止めたとして、いったい誰が救われるっていうんだろう？　残念ながらもう優奈ちゃんを助ける事はできない。
私達のやろうとしている事はいったい何なんだろう？　私の行動理由は？　もちろん愁のためだ。あんなビラ配られて黙っていられる訳がない。そう黙っていられない。だから行動に移してる。で、行動の先には何がある？　何も無いかもしれない。
「どうしたの香奈実？　なんか暗いよ」
由梨絵ちゃんが私の顔の前で手をひらひらさせた。
「あ、うん。大丈夫。ちょっと立ちくらみ」
由梨絵ちゃんはカバンからガムを取り出して口に放り込み、包み紙を床に捨てた。
「意味ないと思ってるでしょ。私らの行動が」
「それは……」
「テンション下がるの早いよ。あのね、気に食わない事をね、そのままにしちゃダメなんだよ」

「……」
「なぁなぁで生きるくらいなら今ここで死ね。優奈の事も玲菜の事も、アンタの彼氏の事も。理解出来るのは今だけなんだよ。大人になったら手遅れだ。今の私らはね、まだなんとかちゃんとここに立ってる。でもそのうち私らは必ず座椅子がないと生きていけないような人間になる。だから座椅子に座る前に動かなきゃダメなんだ。分かる？」
　私は頷いた。確かにそうだ。大人になったら色んな事が分からなくなるし、考える事に飽きて疲れて、そのうち全てを受け入れる寛容な仏様になってしまう。
「ほら行くよ。店員ぶっ殺してでも玲菜のこと聞き出すんだ。玲菜が見つかればきっと全てが解決するよ」

　玲菜ちゃん御用達のお店はカムイノミという名前だった。プレハブみたいなだっせー小じんまりとした建物で、店の中の席は若い女と馬鹿馬鹿しいほどに汚い顔をした中年のババア共で溢れかえっていた。
「んじゃ、ちょっくら聞いてくるよ」
　明日菜ちゃんはズカズカとレジカウンターに向かうと、どっしりとカウンターに両肘をついた。レジ番をしていたウェイトレスはびくっと肩を震わせた。
「あの、えっと。ご注文はお席で……」
「宿木玲菜、知ってる？」
「え？」
「だから宿木玲菜知ってる？」
「さ、さぁ……」
「お前じゃダメだ。他の店員連れてこい」
　ウェイトレスが店の中央で注文を取っていた男の人に目配せをした。店長らしき男がこちらにやってくる。
「何か？」
「宿木玲菜知ってる？」
　男は困った顔になった。
「うちの店員にそのような名前の子は……」
「違う違う。客だよ。客の名前。ここの常連」
「いや、あの。お客様の名前は、ちょっと、知っているはずがないというか……」
「確かにそうだ」
　と、呟いたのは由梨絵ちゃん。
　明日菜ちゃんがこちらを振り返って言った。
「由梨絵、玲菜の写メとか持ってる？」
「ない」
「香奈実は？」
「玲菜ちゃんの存在は昨日知った」
「じゃあ紙とペンは？」
　私はカバンからメモ帳とボールペンを取り出して渡した。いつもメモ帳にメモ書きをして愁に渡していたから、すっかりメモ帳を持つのが癖になってしまった。
　明日菜ちゃんはレジカウンターの上で何やらメモ帳に絵を描き始めた。肩越しから観察しているうちに何を描いているのか分かってきた。女の似顔絵だ。多分玲菜ちゃんだろう。
「さっすが明日菜ちゃん。絵うまいね」
　明日菜ちゃんはイラストレーターになるのが夢なのだ。彼女はそれだけの画力とやる気と無鉄砲さを持っていて、何より大バカだった。
「出来た！」
　明日菜ちゃんはメモ帳をウェイトレスの顔の前に突きつけた。
「この顔に見覚えはある？」
　すると、ウェイトレスは目を見開き「あ！」と歓声をあげた。
「知ってるこの子。この前大食いしてた」

「大食い？」
　明日菜ちゃんが顔をしかめた。
「うん。三日前くらいにここに来て。えーと……。チョコレートムースのパフェと、ストロベリーパフェと、あとグランドデラックスプレミアムストロベリーパフェ食べてた」
　私は近くの席に置いてあったメニュー表を取り上げて、そのふざけた名前のパフェを探した。
　そして驚愕した。お値段なんと八千五百円。名前だけじゃなくて値段もふざけてる。
　パフェの写真がでかでかと載っていたけど、通常よりも五倍くらいはありそうなグラスの中にクリームやらキュウイやらとにかく果物が無造作にぶちこまれていて、一番上にはイチゴが三十個くらい乗っかっていた。
　ウェイトレスが笑いながら言った。
「凄かったですよー。まずチョコレートムースとストロベリーパフェを余裕で平らげて、最後にあのパフェを食べてたんですけどね、一人で汗かきながら三時間かけて完食してましたから」
「一人で……？」
　由梨絵ちゃんが呆れたため息をついた。そして小さく笑った。
「玲菜は今頃、トイレにこもってるのかもしれないね」

　私達は琴似本通の裏にある駄菓子屋でラムネを買った。店の前に置いてあるベンチに座ってラムネをごくごく飲む。
「ねぇ由梨絵ちゃん」
「なに？」
「一万円近いお金をかけてさ、一人で普通のパフェ二つと、デラックスプレミアムグランドストロベリーパフェを食べる時って、どういう時？」
　由梨絵ちゃんはラムネを一気飲みして、ビンを地面に置いた。
「グランドデラックスプレミアムストロベリーパフェな。まぁ、頭がおかしくなった時かな」
「明日菜ちゃんは？」
「あ？　くだらない質問すんな」
　私は黙った。
　そうだ。私の質問はくだらない。答えは分かりきっている。きっと玲菜ちゃんは自殺する前の儀式を行ったのだろう。
　自殺の儀式がパフェ。
　ほらやっぱり。人生ってその程度のものなんだ。

　その日の夜。私は十三センチのサブウーハーが二つ搭載されている巨大なCDラジカセを運びながら、ひっそりとした住宅地を歩いていた。重さ七キロ。死にそう。
　夜の琴似はいつでも騒がしい。琴似は飲み屋が多いから酔っぱらいがそこら中に溢れているし、地下鉄と JRが近くにあるから人の流れが絶えない。でも地下鉄琴似駅から三角山の方へ進むと音も空気も静かになってきて、ここが街なんだということを忘れられる。
　どこからともなく虫の声。近所の家でバーベキューでもしているのか肉の焼ける匂いがする。背後から子供の声がして振り返ると、花火をふりまわしながら走っている小さな男の子と女の子が居た。
　二人の子供の目は狂気的に純粋で、あぁ出来る事ならこの二人の命が短命でありますようにと心の底から願った。この世界に神様はいないし、神様が居たとしても心を浄化してくれない。人というのはただ心を腐らせ、体を老化させ、生きている意味を考えるのを忘れ、気づいたら火葬場で燃やされるだけの悲しい生き物なのだ。
　本能のままに食べて寝るだけの動物の方がまだ人間的で、誇らしい生き物だろう。
　子供たちが走り去り、目的地の公園に近づいてきた。闇の中に沈む公園はどんよりしていて、孤独で怖くて、私の心は煌めいた。
　でも心の煌めきはすぐに絶望と嫌悪と殺意に変わった。公園の東屋には進学校である琴別高校の制服を来た男女五人組が陣取っていたのだ。皆げらげら笑って楽しそうに話してる。男子も女子も顔が整っていて清潔で、雰囲気が穏やかで、なんだか見ていて微笑ましかった。

ただそこに居るだけでみんな輝いてた。高校生だった。
私と大違いだ。
急に泣きたくなった。私の欲しい物があの東屋に全部詰まってるように思えたから。
この五人はきっと毎日が幸せで、いつか社会に出て、大多数の人間と同じような幸福を手にして、穏やかな川の流れのような人生を送っていくんだろう。
どうしてこんなにも環境が違うんだろう。
私は彼氏が植物人間。おまけにあんなビラを配られて、学校では頬をつねられてその傷は消えなくて。
なんだよもう。
私が何をしたっていうのさ。
不公平だ。
私も毎日素直に笑いたい。
でもそんなの無理。私は彼氏が植物人間になった時点で生きる気力を失った。でも必ず生きてやるっていう矛盾した気持ちも心の奥にへばりついている。なぜなら私の心の大部分には絶対的な憎しみが宿っているから。
そう。私の生きる活力は憎しみだ。この憎しみをどうにかしない限り、死ぬに死ねない。そして生きる活力は残念ながらまた増えた。意味不明なビラを配り、愁を殺人者扱いしたあのババア。あいつは刺し違えてでも殺してやる。
いや違う。私は殺したいんじゃない。きっと自分の憎しみを世間にアピールして、私が受けてきた理不尽な出来事を訴えたいのだ。
おかしな話だ。生きる気力なんてないのに、どうして私は誰かに見て欲しいと願うんだろう。
やがて五人組は公園から去っていった。私はやっと公園の中に入った。
そして東屋のベンチにCDラジカセを置いた。カバンから袋を取り出す。中にはさっきコンビニで買ってきた単一の電池が十個入っている。それを全てCDラジカセにセットする。
そしてボリュームを最大にして、CDを再生した。私は原っぱの上に寝転がった。
その途端、CDラジカセからカントリーロードが爆音で流れ始めた。英語版じゃなくて、ジブリの映画で流れた日本語版だ。
真っ暗な闇の中で響くカントリーロード。凄く刺激的で、興奮した。
夜空には三日月。空の下には無数の民家。ただ後ろを向けば、そこには三角山が闇の中に薄っすらと見える。この景色の中に私の居場所はあるだろうか？
多分、無い。

カントリーロードは間奏に入り、リコーダーの演奏が始まった。それが終わりだった。大人たちがわらわらと公園の中に入ってきたのだ。
大人たちの群れから、脂ぎった顔の中年親父が目の前までやってきて、私を見下ろしながら言った。
「君は何をしているのかね？」
私は起き上がって、スカートのポケットから携帯電話を取り出した。一、一、ゼロと打ち込んで携帯の画面を見せた。親父は顔を引きつかせた。
「ねぇおじさん。一つ教えてあげる。今の日本はね、赤の他人の女の子に話しかけるだけでわいせつ罪になるんだよ」
私は発信ボタンを押した。親父は逃げた。
これで明日、北海道新聞の端っこにこんなニュースが載るだろう。
西区在住の男が、夜中に公園に居た女子高生に声をかけるという事案が発生。
全く、世の中ってのは本当に物騒だ。

　夏休み二日目の朝。私は電話のコール音で起きた。寝ぼけた頭で携帯を手に取る。
「ふぁーい」
「あ、香奈実？　起きてる？」
「あー。明日菜ちゃん？」
「アンタさ、今から学校来れる？」
「なんでー。もう夏休みじゃーん。サマー、ホリデ〜」
「どうしたの？」
「なんでもない」
「まぁいいからさ。早く学校来てよ」
「だからなんで？」
「来れば分かる」
　そう言って明日菜ちゃんは電話を切った。
　うんざりした。
　これ以上、何も起きないでくれ。

　校門の前に行くと見たことのないババアが居て、メガホンで何やら叫んでいた。どうやらババア連中の間ではメガホンで叫ぶのが流行っているらしい。
　先に着ていた明日菜ちゃんと由梨絵ちゃんが近づいてきた。
「誰？　あのおばさん」
　由梨絵ちゃんがため息をついた。
「田中啓太の母親」
「あぁ」
　田中啓太の名前は由梨絵ちゃんから五千回くらいは聞かされていた。愁と優奈ちゃんと同じ中学校だった人で、田中啓太と優奈ちゃんは高校も同じだった。由梨絵ちゃんは田中啓太が優奈ちゃんをいじめていたと思っているらしいけど、確かな証拠とか根拠は何も無いらしい。
「田中啓太が優奈をいじめてたんじゃないかって疑ってるのは私だけじゃないんだ。だからあぁやって必死に抵抗運動してるんだ」
　ばあさんはまるで選挙みたいに、田中啓太は！　啓太は！　啓太を！　と叫んでいた。
「みなさん信じてください！　啓太は、私の啓太は！　いじめなんかしていません！　本当なんです。あの子は本当に良い子で、いじめをするような子ではありません。だから宿木優奈さんは、きっと勉強とか家庭の問題とか、そういう事が原因で自殺したんです！」
　げんなりした。これ以上私の前で醜い姿を見せないでくれ。
　人間とはこうも醜いものなのか。
　由梨絵ちゃんは腕を組みながら言った。
「昨日家に帰った後、知り合いに色々聞いたんだけどさ……。なんか、明石愁って、田中啓太にいじめられてたらしいよ」
「え？」
　その言葉で私の頭は混乱した。
「なにそれ。知らない。聞いてない。愁がいじめられてたなんて……」
「いいから聞け。田中啓太と明石愁と優奈は同じ中学。んで田中と優奈は高校も同じ。ここまではいいでしょ？」
　私は両手の拳を握り締めながら頷いた。爪が手のひらに食い込む。
「でね、田中は強引に優奈を自分のグループに引き入れてたらしいんだよね。そして、どうしてかは知らないけど、田中は同じ中学だった明石愁をいじめ始めた」

　田中啓太と愁は高校が違うんだから、学校外でいじめていた、という事になるだろう。それが本当なら、また生きる活力が増えてしまいそうだ。
「まぁ田中はそうやって人をいじめるのが趣味でね、さっきも言ったけど田中啓太が優奈もいじめてたんじゃないかって噂が広まってるんだ。あいつ、高校でも色んな人をいじめてるらしいからね。あいつはもう病気だよ」
　だったら田中の母親は息子の無実を訴えるのではなく、むしろ息子を問い詰めるべきなのではないだろうか。
「まぁそういう事なんだけどさ、本当に田中が二人の事をいじめていたとしたら、明石愁と優奈は繋がっている事になる。そうでしょ？」
　植物人間になった愁と、自殺した優奈は田中啓太という男で繋がっている。これは果たして偶然か？　そうは思えない。
　不吉な予感がした。
　愁は本当に”交通事故”に遭ったのか？　事故ではなく事件だったんじゃないか？
　胸がざわめいた。
　ごめん愁。
　私、もう抑え切れないかもしれない。

　情報収集は二人に任せておいて、私は愁が入院している病院に来ていた。
　私の行動理由は二つになった。一つはもちろん、なぜ愁が殺人者呼ばわりされているのか突き止める事。もう一つは、本当に愁は不幸な交通事故に遭ったのか。それとも事件に巻き込まれたのか。この問題を徹底的に突き止めることだ。
　大きく深呼吸。
　愁の個室の前に立つと、なんだか病室に入るのがためらわれた。
　普通の高校生がある日突然車に轢かれて、女子高生が自殺して、死んだ子の妹は行方不明になっていて。
　無実の人たちが不幸になり、そして大人たちは加害者をかばっている。これはもう日本の常識なのだと納得するしかないんだろうか。
　いや、誰がそんな馬鹿馬鹿しい常識に納得なんてするもんか。納得するくらいだったら死んだ方がマシだ。
　個室のドアを開けると、愁のお母さんが椅子に座っていた。
「あ、どうも。こんにちは……」
「あらあら。香奈実ちゃん。いつもありがとねー」
「いえ、そんな……」
　お母さんはベッドでぼーっとしている愁の頬をぺちぺち叩いた。
「ほらほら。アンタの彼女が来てるんだから挨拶くらいしなさい」
　愁は無言。お母さんは苦笑いを浮かべた。
「ほんっとごめんねー。でも大丈夫。リハビリさせまくってこいつの脳みそ復活させてやるから。だからいつでも来てね」
　嬉しかった。もしも「もう来なくていいよ」とか、「愁の事は忘れて新しい彼氏でも作ったら？」なんて言われたら私は気が狂って屋上から飛び降りてしまう。
「はい。何度でも来ます。あ、今度愁が好きなお菓子持ってきますよ」
　お母さんは突然両手で顔を覆った。
「良い子だわ！　お母さん感動！　貴方は今日から明石香奈実よ！　宜しく！」
「じゃあ亨から花嫁修業しないとダメですね。頑張っちゃおうかな」
　お母さんは愁のお腹をぽんぽんと叩いた。
「アンタは幸せものねぇ。って何ぼーっとしてんのよ！」
　次はお腹に肘打ち。愁はやっと「あー」とかよく分からない声を出した。
「ほら。明日またリハビリやるからね。あんまりぼやぼやしてたら、アンタのパソコンのハードディスクの中身、世間に公開するわよ？」
「み、見たんですか？」

　お母さんはげらげら笑った。
「ちょっと心配しないでよ見てないわよー。だからそんな心配そうな顔しないで。大丈夫、愁のプライベートは香奈実ちゃんだけのものよ。ってキャー！　なんかこう、それって圧倒的な愛って感じよね。貴方のプライベートを一から百まで知る事が出来るのは、わ、た、し、だ、け！　キャー！」
　私は爆笑した。愁のお母さんはいつでも私を笑わせてくれる。
「じゃあ私はそろそろ行くわね。だーいじょうぶ。おばさんだって空気は読めるからね。いわゆるKYってやつではないのよ。だから二人でごゆっくりとね。ごゆっくり」
「あ、はい。ありがとうございます」
「ってまぁこれからパートなんだけどねー。もう超だるいわー」
　と言って、お母さんはそそくさと帰っていった。愁は本当に幸せ者だ。
　さて。
　植物人間相手にどこまで話を聞きだせるか。可能性は、一ミクロン。
「愁。単刀直入に聞くわよ。アンタいじめられてた？」
「んー」
「どうなのよ？」
「……」
「ねぇどうなのさ。話聞いてる？」
「んー」
　いじめという言葉に何かしらの反応を示すかも。って少しだけ期待してたけどやっぱり無理だった。
　私は携帯電話を開いた。さっき由梨絵ちゃんに田中啓太の写真を送ってもらったのだ。
　携帯電話に田中啓太の写真を表示して愁に見せた。
「……んー」
　愁は顔をしかめたけど、それは田中啓太に反応したというより、ただ変なものを見せられて戸惑っているっていう感じだった。
　ふと、お母さんのさっきの発言が頭に響いた。
　アンタのパソコンのハードディスクの中身、世間に公開するわよ？
　愁のパソコンのハードディスク。それを見れば、何か分かるんじゃないのかな？
　そうだ。それだ！　パソコンの中身はプライベートの塊だ。中を見ればきっと何かあるはず。
　それにお母さんは中身を見ていないらしいし、まだ見つかっていない何かが隠れている可能性は十分にある。
　体中にエネルギーが蔓延するような気持ちだった。頭がギラギラと冴えていく。
　思い立ったらすぐに行動。私は愁の頬にキスをして、病室を飛び出した。

　私は愁の家の倉庫に入り、自転車のカゴからカギを持ちだした。堂々とドアを開けて家の中に入る。私は将来の嫁だ。文句あるか。
　階段を上がって二階に行き、愁の部屋のドアを開けた。
　部屋はとても綺麗だった。きっとお母さんが掃除してるんだろう。コンポや本棚には埃が全くない。床に落ちている物は何一つなくてとにかく清潔だった。
　清潔すぎるくらいに、清潔だった。部屋っていうのは多少汚い方が人間らしい。
　テーブルに置いてあるノートパソコンを開いて電源をつけた。唾を飲み込む。罪悪感はあった。私は確かに愁の彼女だ。でも彼のパソコンを盗み見るなんて事が許される程、彼に愛されていただろうか。
　いや、そもそもどんなに愛されていたとしてもこんな事はしちゃいけない。
　でも。
　私は知りたい。何があったのかを。
　それに、私は私の大切なものをぶち壊した奴らを許さない。愁の交通事故が偶然じゃなくて人間の思惑が動いた上で起きた。という可能性が少しでもあるのなら、なんとしてでも真実を見つけ出してやるんだ。そしてもしも、本当にもしも、愁の交通事故が”事故”じゃないのだとしたら、私は愁を壊しやがった奴をなぶり殺してやるんだ。

パソコンにデスクトップ画面が表示された。手当たり次第にフォルダの中を漁ってテキストファイルとワードファイルをどんどん開いていく。でも特に成果なし。次にブラウザを開いてお気に入りのフォルダを開く。愁が持っていたブログは知ってるけどそれはスルー。私が知らない秘密のブログやツイッターのアカウントなどがあるかもしれないと思って探したけど、それらしいものは見つからなかった。
ファイル名検索でdocと入力してワードのファイルをあらかた探してみたけどやっぱり気になるタイトルのファイルは見つからない。
次に、「自分専用」という名前のフォルダを開いてみた。中には音楽ファイルとか動画サイトで落としたと思われる動画がちらほら。たいしたものは入ってない。試しにフォルダのオプションを開いてみると、隠しフォルダは非表示の設定になっていた。
隠しフォルダを表示するように設定した、またフォルダの中を漁る。
そして心臓が止まりそうになった。フォルダの中にテキスト形式のファイルがぴょこんと出てきたのだ。
すぐには開けなかった。ポーチからラークとライターを取り出したけど床に落とした。拾って一本取り出して火をつけて口にくわえた所で灰皿がない事に気がついて、慌てて携帯灰皿をテーブルに置いて灰を落とした。
見つけたテキストフィアルには名前がなかった。どうやら全角スペースでも打ち込んでいるらしい。
息を大きく吸い込んで、ファイルを開いた。文章がぎっしり詰まっていた。
『香奈実によくメモをしろと言われているので、自分の事についても文章にしておこうと思う。人間が一番忘れがちなのは自分の記憶と過去の感情だと思うから』
そんな一文で始まっていた。手が震えて、鳥肌が立った。逃げ出したかった。明日菜ちゃんと由梨絵ちゃんのところに戻って、三人で笑いながら服屋にでも行ってだらだら買い物でもしたい気分だった。
『田中啓太の事は書かずにはいられない。高校生になってから、田中は俺を攻撃するようになった。きっかけは何だったのか今ではよく分からない。心当たりがあるとすれば従姉妹だろうか。俺の家に遊びに来ていた従姉妹と一緒にコンビニへ行った時、偶然田中に会ったんだ。その日を境に田中は毎日俺にメールをしてくるようになって、あの美人な従姉妹を紹介しろとしつこく迫ってきた。もちろん俺はメールを無視し続けた。でも田中のメールを無視しているうちに、俺はあいつに攻撃されるようになった』
『田中と田中の子分達は毎日のように校門で俺を待ち伏せして、人気のない所に連れて行った。そして犬の糞を顔に塗られたり、体中に小便をかけられたり、コンビニで万引きをやらされたり、公園で遊んでいる小学生の群れに突き飛ばされたりした。ある時、突き飛ばされた俺は小学生の体に直撃して、不幸な小学生は倒れて顔を地面に強く打って怪我をした。毎日が地獄だった』
テーブルに思い切り頭を打ち付けた。おでこがじーんと痛んだ。そしてもう一度、頭を打ち付けた。鋭い音が耳に響く。頭が割れそうだった。何度も何度も頭を打ち付けた。手で腕やお腹や首をかきむしった。気づいたら腕には引っかき傷が沢山できていた。喉の奥が熱くて、頭が燃えるように熱くて、鼻の中は焦げそうだった。
殺意しかなかった。いや違う。もう私は田中を殺す事に決めていた。マジで殺人上等。人殺しと言われようとなんだろうと構わない。バカな奴のために自分が悪人になる必要はないとか、喧嘩は手を出した方が負けだとか、自分が殺人者になってどうするんだとか、もっと平和的に、法律の上で戦うべきだとかそんなこと言う奴らは全員ビルの屋上から飛び降りて内蔵ぶちまけて死ねばいい。
『ある日、田中は自分のグループに優奈を入れた。優奈は脳みそとガラの悪い男と仲良くしてみたい年頃だった。優奈とは同じ中学で、一緒に遊んだ事は無かったけど、学校ではよく話すしCDの貸し借りをした事もあったし良い友だちだった。だから彼女が田中のグループに入って残念だった』
『それからというもの、俺を攻撃する時は必ず優奈を連れてきた。優奈は何もしなかった。ただ俺が田中に攻撃されるのを、呆然と見ていた』
やっぱり繋がってしまった。もう涙も出ず、体をかきむしる事もできず、ただただ、ぼんやりと画面を眺め続けた。
『でもある日、優奈は始めて俺を攻撃した。その日の優奈は機嫌が悪かった。その日、俺は地面に押し倒されて、田中の仲間たちに押さえつけられていた。そして田中は絵の具を俺の口の中に垂らし続けていた。その時、優奈が言ったのだ。私にもやらせて、と』
『優奈は震える手で田中から絵の具を受け取り、チューブを絞って俺の口の中に垂らした。優奈は穏やかな笑みを浮かべていた。何かから解放されているような表情だった。俺はその顔を見てなんだか嬉しくなって、心の中で呟いていた

。何があったか知らないけど、良かったね優奈、と』
　深く息をついた。長い。
　なんなんだよ。文章なんか大嫌いで、いちいちメモ書きする事すら面倒くさがっていたのに。どうしてこんなに長い文章を書けるんだよ。
　田中啓太。こいつは絶対に許さない。田中は天性の悪人だ。この文章を見る限り、田中は圧倒的な暴力は一切やっていない。体に傷がつかない攻撃ばかりだ。もしも彼の体に傷があったら私は百パーセント気づいたはず。必ず。絶対に。
　陰湿で感覚がイカれてる。日本の政治家よりも胸糞の悪い人間がこの世に存在するなんて思わなかった。
『優奈が俺を攻撃したのはそれきりだった。そして後日、優奈は三万円を入れた封筒を持って俺の家にやってきた。封筒を俺に押し付けて、泣きながら頭を下げて何度も謝ってきた。優奈は俺の目の前で大事にしていたワンピースをハサミで切り裂いた。俺はお金を受け取らずに優奈を追い払った。優奈が本気で後悔して謝っているのは分かったけど、優奈を許す事も、お金を受ける事も、全てが屈辱だった。それに無抵抗な俺に一方的にひどい事をして、勝手に後悔して謝ってくるなんて勝手すぎる。ふざけんなって思った。かと言って、優奈をボコボコにするのは更に屈辱的だと思った』
　愁の気持ちが分かるような気がした。
　もういじめられたら最後、屈辱的な気持ちから逃れる事はできない。愁が言うように、何をしても屈辱的で惨めなのだ。優奈をボコボコにしても気が晴れる訳がない。
　愁に屈辱的な感情から逃れる道なんてあっただろうか？　無かったに決まってる。
　どうする事も出来なかったんだ。記憶は消えない。忘れようとしても忘れられない。どうあがいても、先には屈辱的で惨めで苦しい道しかない。
　宿木優奈はいじめをした人間としては最善を尽くしたのだろうが、一度手を出した時点で彼女はクズ人間なのだ。
　私は床に倒れ込んだ。
　宿木優奈は自責の念にかられて自殺したのだろうか？　そうは思えない。人は自責の念にかられて死ぬような謙虚な生き物じゃない。もっと外側からの攻撃に苦しんで死ぬもんだ。
　愁と優奈の繋がりは分かった。でも優奈が死んだ理由はまだ分からないし、愁の交通事故に関連性も見えてこない。玲菜ちゃんの失踪の理由もだ。
　愁の隠されていた真実を知る事は出来たけど、事件の真実は何も分かってない。
　でも、私はもう、考える事と知る事に、疲れていた。

　その日の夜。私達はコロポックル・コタンに集合していた。
　私は水だけ。明日菜ちゃんはモカグラニータとビッグサイズのパンナコッタ。由梨絵ちゃんはアイスコーヒー。
　明日菜ちゃんはパンナコッタを四口で平らげると、いきなりビシィっと手を上げた。
「マスター！」
　カウンターに居たマスターがニコリと微笑んだ。
「なに？」
「灰皿！」
「あいよ！」
　マスターが灰皿をテーブルに置いた。ちなみにビッグサイズのパンナコッタは学生限定メニューである。
　明日菜ちゃんはタバコを吸い終わると、ストローでずずずっと音を立てながらグラニータを飲んだ。
「で、話ってなに？」
　由梨絵ちゃんが指でテーブルを叩いた。
「ていうかその穏やかな表情やめて怖いよ」
「どうして？　川のせせらぎのような、いや仏のように優しくて寛容な心が、私の顔に浮かんでいるだけなのよ」
「違うね。その顔は憎悪に満ちてるよ」
　由梨絵ちゃんの言葉を無視して、私はＡ４用紙をテーブルに置いた。紙にはさっき見た愁の文章が全部印刷されている。あの文章データを私のメールアドレスに送って、家で印刷したのだ。
　二人は全部読み終えると、同時に顔を上げた。明日菜ちゃんが真剣な表情で言った。

「これを私達に見せたって事は、もう覚悟してるんだね」
　私は頷いた。
　正直言うと、この文章を他人に見せるのは凄くためらった。愁が死んでるならまだしも彼は生きている。だからこんな文章を勝手に人に見せるなんてどうかしてるし、なにより愁が心に秘めていた思いを他人に見せるっていうのは、許される事ではない。
　でも愁は、人の悪意によってチューリップになったのかもしれないんだ。そして悪魔のようないじめを受けていた。死んだ優奈との関連性だって疑わない訳にはいかない。
　この二人になら見せてもいいと思った。そして二人に見せるという事は、私が明日菜ちゃんと由梨絵ちゃんを絶対的に信頼している事の証で、もう後戻りする気はないという表明だった。
　由梨絵ちゃんがコーヒーを啜った。
「アンタは私と明日菜の友達だ」
「うん」
「じゃあ私らはもう黙っていられないね。理屈はいらない」
　明日菜ちゃんが背もたれにどっしりとよしかかった。
「推理小説に出てくる探偵はどいつもこいつもバカのひとつ覚えみたいに推理で事件を解決するね。でも残念ながら私らの頭はパーだ。じゃあどうすれば事件を解決できるのかな？」
　私達は見つめ合い、笑い合い、そして頷き合い、三人同時に声を出した。
「暴力だ」

　私達は田中の家の目の前にあるマンションの駐車場でたむろしていた。私と由梨絵ちゃんはリュックサックを背負っている。夏のラフな格好にリュックサック。なんだかおかしい。
　風は無く、じめじめしていて、夜空には星がいくつか。
　蒸し暑く、けだるい夜だった。
　田中の家に行ったけど誰も出なかったし、明日菜ちゃんが石を投げつけてガラスを割って家の中に入ってみたけど中は無人だった。だからこうして田中が帰ってくるのを待っているのだ。
　そしてようやく田中が道の向こうからやって来た。かれこれ三時間は待った。
「行くぞ！」
　すぐに由梨絵ちゃんが駐車場から飛び出して、驚いて立ち止まっている田中に正面から突進して突き飛ばした。田中が倒れた所で間髪入れずに私と明日菜ちゃんが田中に馬乗りになって押さえつけた。そしてガムテープで口をふさいだ。
　そして由梨絵ちゃんがスカートのポケットからカミソリを出して、田中の首に押し当てた。しかし勢い余って刃の先端が突き刺さって血が出た。
「あ、ごめん」
　田中は悲痛な顔を浮かべてもがいている。その顔はお笑いもんだった。まるでこの世の終わりを見たかのような顔をしている。何もそこまでビビらなくてもいいじゃん。
　由梨絵ちゃんは田中の顔を見て鼻で笑った。
「まぁそういう事。暴れたらマジで刺すよ。嫌ならおとなしく付いてきな。それともここでお前の頸動脈ぶった切ってやろうか？」
　田中が唾を飲み込むのが分かった。
「オッケー！　よしさっさと立て立てー！」
　という事で、私らは強引に田中を歩かせて公園まで連れて行った。公園には街頭が少なくて完全に闇の中って感じだったから、ここなら何をしてもバレないだろうって思った。
　田中を公衆トイレの中にまで運ぶと、まず私は背負っていたリュックサックを汚い床の上に置いて、中から長くて太いロープを取り出した。そしてロープの先端を洋式トイレに縛り付けて、もう片方の先端を田中の手首にしっかりと結んだ。てめぇの犬小屋はこのクソ汚い公衆トイレがお似合いだ。
　三人で仁王立ちして田中を見下ろす。田中は恐怖でギラついた目をして私達を見上げながら必死に毛虫のようにもがいている。うざい。このまま顔を便器の中に突っ込んでやろうか。
　由梨絵ちゃんが田中の前に腰をおろした。
「さてさて田中君。これからアンタにいくつか質問をします。首を縦に振るか、横に振れ。オーケー？」
　田中が首を縦に振ったのを確認してから明日菜ちゃんが聞いた。
「アンタは明石愁をいじめてた。そうでしょ？」
　田中は首を横に振った。だから私はこれまた持ってきていたスコップで便器の中の水をすくいあげ、田中の顔にかけた。
　田中、絶叫。
　なぜだろう。
　不思議だった。私の愁にもっとひどい事をしたのに、自分がやられたらこんなに悲痛な顔をして叫ぶんだ。意味分かんない。
「ねぇ田中くぅん。愁のこと、攻撃してたよね？　そうだよね？　ふふっ。ねぇねぇ。もっとかけていい？　次はどこにしよっか？　鼻の中？　口の中？　それともこのスコップでその腐った目ん玉突き刺してあげようか？　そうすれば、貴方はもう人を傷つけられなくなる。平和な人間になれる。だって目が見えなければ何も出来ないもんね」
　由梨絵ちゃんがげらげらと笑った。
「去勢するみたいなもんだな。マジでウケる」

田中は突然暴れるのをやめた。降参したのだろう。
私も田中の前に腰をおろして、質問をした。
「愁のこと、攻撃した？」
田中は首を縦に振った。
「宿木優奈のことは？」
答えはノー。
「いじめてないの？」
答えはイエス。こいつの様子を見る限り嘘はついてないらしい。この期に及んで嘘はつかないだろうし。
「じゃあなんで優奈は死んだの？」
田中は何やら喋ったらしいけど、ガムテープのせいで何を言っているのか分からなかった。
「ねぇ由梨絵ちゃん。もうガムテープ外しても大丈夫じゃない？」
「そうだね」
由梨絵ちゃんがガムテープを外すと、田中は消え入りそうな声で言った。
「分からない」
「んな訳ねぇだろ！」
明日菜ちゃんが田中を蹴飛ばした。うめく田中。哀れ田中。
「まぁまぁ明日菜ちゃん落ち着いて。私達はね、いつでもこいつをボコボコに出来るんだよ。なんならこいつの顔面に犬の糞を置いてもいいんだよ。顔がトイレのかわり。えへっ」
田中はもう泣いていた。
「ねぇ田中君。本当に宿木優奈が死んだ理由分からないの？」
「ほ、本当に分からない。ただ、心当たりは……」
「だからそれを早く言えよ！　知ってること全部話さないと家に帰してやんないからね」
「まぁまぁ由梨絵ちゃん落ち着いて。私達はね、いつでもこいつの口の中にロケット花火を突っ込めるんだよ。なにせ夏だからね」
田中の顔は真っ白だった。これ以上なぶったら恐怖で失神するかもしれない。
「で、その心当たりってなぁに？　話聞いてあげるから、ほら。お姉さんに話してみて。嘘とか適当なこと言ったら、こうだからね」
私はスコップで田中の腕を突き刺した。悲鳴。腕から血がにじんできた。
大丈夫だよ愁。
私はアンタの仇をうつからね。アンタを苦しめたこいつを、いま、私が苦しめてあげてるからね。
「はい。スタート。話してちょーだい」
田中は唾を何度も飲み込み、沈黙を続けた。
「田中君？」
田中はハッと目を見開いた。
「あの、その……。優奈のやつ、母親と、喧嘩したらしくて……」
「喧嘩？」
「優奈は愁をいじめた事を凄く後悔しててさ。母親に話したらしいんだ。自分はこんな事をしてしまいましたって。だから銀行のカードを渡してくれって」
「銀行のカード？」
「なんかよく知らねぇけど、優奈の母親って超過保護で……。優奈の銀行のカードは母親が管理してたらしいんだよ」
「気持ち悪い親だね。死ねばいいのにね。で？」
「優奈は貯金を降ろして、謝罪の意味を込めて金を全部、愁に渡すつもりだったらしいんだけど……。母親はカードを渡さなかったらしい。アンタは悪くない。だから謝る必要はない。むしろ悪いのは明石愁だとか言って。きっと明石愁が優奈にひどい事したから、優奈はやり返しただけなんじゃないのって、そんなような事を言われたらしい」
「そっかそっか。くそったれな親だね。でも優奈は三万円を愁に渡してるよね？」
「それは……。多分、自分の持ち物売ったんじゃないかな。コンポとか、ゲームとか……」

「まぁそんな話はどうでもいいや。で、優奈ちゃんは愁に謝った後、親とはどうしたの？」
「近所の人たちにビラを配ったらしい。そのビラ見たけど、明石愁が優奈をいじめて苦しめてる。優奈は苦しみすぎて自分は悪くないのに自分が悪いと思い込んで、明石愁に謝るなんて愚かな事をしたとか、そういう事が書かれてた」
「それで、優奈ちゃんはどうしたの？」
「死んだ」
「……」
　そうか。優奈は自責の念と、バカな大人に殺されたのか。
　でも田中ははっきりとした口調でこう言った。
「でも、なんつーか……。あのビラに衝撃を受けて死んだって訳じゃないと思う……」
「どういう事？」
「分からない。でもなんか、あいつ……。父親がどうのこうのって悩んでたからさ。父親ともなんかあったんじゃないかな？」
「次は父親？」
「でも父親と何があったのかは本当に知らないんだ。何も分からない。俺が知ってる事は、もうこれ以上はなにもない」
　私達は顔を見合わせた。明日菜ちゃんは露骨にげんなりした顔をしていて、由梨絵ちゃんは唇をかみしめていた。
　頭が混乱してきたけど、まだまだ聞かなきゃいけない事は沢山ある。私は別の質問をぶつけた。
「じゃあ玲菜ちゃんの行方は知ってる？　あの子ね、いま行方不明なの」
「知らない」
「本当に？」
「知らないよ。マジで知らない。優奈の妹だろ？　妹が行方不明になってるなんて話、いま始めて聞いたよ」
「ふーん？」
「だからさ、こんな状況で嘘つくわけないだろ。本当に知らないんだよ」
　使えない奴だ。
「分かった。じゃあ別の質問。愁は交通事故にあったの？」
「は？」
「だから、愁は交通事故にあったの？」
「な、なに言ってんだよ。そりゃ交通事故に……」
　私は人差し指を田中の目に突き刺した。また悲鳴。うるさい男だ。
「あのさ、田中啓太っていう一人の人間と繋がっていた二人の末路が植物人間と自殺ってそんなのありえないでしょ。絶対何かあったと思うでしょ。少なくとも、あぁそんな事もあるんだねって納得できる訳ないでしょ」
「知るかよ！　俺が轢いたって言いたいのかよ！」
「田中君。アンタが車で愁を轢いた可能性と、アンタがいじめてた二人が自殺と交通事故っていう悲劇を起こす可能性。どっちの方が大きいと思う？」
「それは……」
「うんそうだね。いじめられて自殺するのは筋が通ってる。でも交通事故は筋が通ってない。地球上では毎日人がぽんぽん交通事故に遭ってる。でもなんでよりによって愁なの？　いじめられて、交通事故にまであってさ。これが偶然だったらひどすぎない？」
「お、俺は何も知らない……」
「信じないよ。愁にひどい事したアンタを信じると思ってるの？　ねぇマジでアンタが何かやったんじゃないの？　ねぇどうなの？」
「ちょ、ちょっと香奈実……。知らない事を聞き出すのはさすがに無理でしょ……」
　明日菜ちゃんがそうなだめてきたけど、もう私の感情はコントロールが効かなくなっていた。
　こいつは愁にひどい事を沢山したんだ。
　私は、愁が苦しんでいる事に気づけなかったんだ。
　涙が流れて頬を伝った。最悪だった。私の悲しみなんて誰にも理解できない。どんなに自分の悲しみを口に出したところで薄っぺらくなるだけ。目の前にある他人の不幸は人を幸せにするけど、耳で聞いた人の不幸話はただのお伽話な

んだ。
　私は両手で田中の服をつかんだ。
「なんか知ってんでしょ？　言いなさいよ。アンタが愁の事あんな風にしたんじゃないの！？」
　田中は何も言わなかった。腹が立って、心が暴れて、鳥肌が立って、気づいたら田中の顔を拳で殴っていた。
「なんで私の愁があんな目にあわなきゃいけないのよ！　いじめられて！　植物人間になって！　なのになんでアンタは普通に生きてんの？　おかしいでしょ！　なんだよそれ。意味わかんねーよ。けっきょくお前みたいなクズがのうのうと生きて罪のない人が不幸になるのが世の中ってもんなのかよ！」
　田中は私の手を振り払った。
「しょうがねぇだろ！　人間なんて俺もお前もどいつもこいつもクズでクズでクズまみれな生き物なんだよ！　食いたきゃ食う！　寝たきゃ寝る！　いじめたきゃいじめる！　人殺したかったら殺す！　自殺したかったら自殺する！　人間はそういう生き物なんだよ。そろそろ理解しろよ！」
　すーっと、何かが体の中から抜けていくような気がした。涙が止まって、鳥肌も引いていって、私はトイレの天井をあおいだ。
　両腕をぶらぶらさせて、体を左右に揺らせた。
「か、香奈実……？」
　由梨絵ちゃんの声が頭に優しく響いた。
「あはっ。そっか。そっかそっか。そうだよね。殺したきゃ殺すんだ。うん分かった。じゃあ私はアンタを殺す。そうだ私は本能で生きてるんだ。殺したいと思ったら殺す。うん、人生ってすごくシンプルだ」
「香奈実！」
　由梨絵ちゃんが私の体を力強く引っ張ってきた。
「もういいから帰ろう。ね？」
「ダメだよ。まだ足りない。それにこいつまだ何か隠してるかもしれない」
　由梨絵ちゃんは苛ついた顔をしながら田中の顔面を三回蹴飛ばした。
「おい！　もう知ってること全部言ったのか？」
「言ったよ！　これ以上の事は何も知らないよ！」
「本当に？　嘘ついてたらマジで殺すよ？　いいか、これが最後だ。アンタの話を信じるなら、優奈は親とトラブル起こしてたんだね？　知ってるのはこれだけ。そうなんだな？」
　田中は何度も何度も首を縦に振った。
　由梨絵ちゃんはため息をつくと、私の肩に手を置いた。
「まずは全てを知る事が先決なんじゃないの？」
　私はまた泣いた。大声で叫びながら、泣いた。
　もう分かったんだ。
　この先の私の人生は、死ぬまで苦痛が続くんだろうって事に。

由梨絵ちゃんと明日菜ちゃんが私を家まで送ってくれた。私は二人に何も言わず家に飛び込んで、自分の部屋のベッドに座り込んだ。
そして、一気に爆発した。
壁に飾ってあるポスターを全部剥がし、コンポを投げ飛ばし、勉強机に置いてある筆箱とか小物入れを壁に投げつけた。
「なんなんだよ！　死ねよ！　クソが！　死ね死ね！　死ねよくそっ。なんだよ。なんで愁があんな目にあわなきゃダメなんだよ！　愁が何したって言うのさ。意味分かんない。なに。なにこれ。どうしようもないじゃんだって全部終わってるじゃん！　もうどうしようもないじゃん！　泣き寝入りするしかないじゃん！」
植物人間。
自殺。
そう全ては終わってる。
終わった事を掘り返して何になる？　何にもならない。
「みんな死ねよバーカ！」
カラーボックスを蹴飛ばした。中に入っていたCDがガラガラと床に落ちる。
息が荒くて、全身が熱くて、胸が潰れそうで、もうどうしていいのか分からない。
全身をかきむしった。体中を引っ掻いて頭を壁にぶつけた。汗がたらりと頬を伝った。
頭の中がクソ熱い。頭がジンジンと痛む。なんだよこれ。意味分かんない。
扇風機を蹴飛ばして踏みつけた。パソコンを壁に投げつけて床に転がっていた漫画を破いた。
突然、遠くから打ち上げ花火の音が聞こえた。窓の方を振り向くと小さな花火が夜空に待っていた。近所のガキが遊んでいるんだろう。どいつもこいつも楽しそうにしやがって。なんで私だけがこんな目に。
環境のせいにするな。
努力すれば必ず報われる。
絶望の先には希望がある。
言い訳するな。
苦難に負けるな。希望を勝ち取れ。
バカじゃないのか。人生ってのは良い環境に生まれて、努力も言い訳もする必要が無くて、絶望も無くて、苦難のない奴らの圧勝か。
毎日笑っていたい。夏に苦痛は似合わない。
目を閉じる。今年の夏、本当は愁と一緒に豊平川で人ごみに潰されながら札幌の夏を感じて、わざわざチケット買って真駒内の花火大会にも行って、どこかに旅行でも行って、札幌駅でデートして、家でだらだらして、無条件な幸福に抱かれているはずだった。
でも現実は違う。どうしようもないほどに不幸で退屈で理不尽で、憂鬱な毎日がちらついていて、愁がどんどん幻になっていくだけだった。
私は勉強机の引き出しを開いた。二十六枚のシングルCD、九枚のアルバム、三枚のベストアルバム。
全部同じ歌手。愁に教えてもらって大好きになった歌手。大切なCD。
私はCDを全部取り出して床に並べた。その時ふと、部屋の隅に転がっている鹿のぬいぐるみが目に入った。これは愁がプレゼントしてくれたものだ。ぬいぐるみもCDも見ているだけで泣きたくなる。
思い出なんて、ただ自分を虚しくさせるだけだ。
私は鹿のぬいぐるみを手にとって優しく撫でた。
「ねぇ愁。私のこと好き？」
「うん、大好きだよ」
「来年は花火大会行くよね？」
「もちろん」

「愁は大学に行くの？」
「そうだよ」
「浮気しちゃダメだよ？」
「する訳ないよ」
「私と結婚してくれる？」
「うん。結婚しよう。俺は香奈実を幸せにするよ」
「本当？　嬉しい」
　また夜空に打ち上げ花火。愁と花火大会に行った日の事を思い出す。人ごみの中ではぐれないように愁はずっと私の手を握ってくれていた。浴衣を可愛いと言ってくれた。出店で一緒にホットドッグを買って食べた。花火を見ている間ずっと愁は私の頭を撫でてくれていた。
　夏祭りにも行った。愁が五百円のネックレスを買ってくれたり、たこ焼きの早食い競争なんかもやった。愁がくじ引きで当てたエアガンをプレゼントしてくれた。何もかもが楽しかった。
　そんな当たり前の幸福はもう永遠に訪れない。私の人生にまた夏が来る事はない。
　どうしてこんな事になったんだろう。私も愁も、ただ普通に生きていただけなのに。
　私は一人で小さく笑った。
　分かってる。
　もう私には何もない。過去は未来にならない。そして現在が未来になる。何も変わる事なく、ただ淡々と全てが過ぎ去っていく。
　私は幸せになれない。
「この歌手、教えてくれたのは愁だったよね」
「うん」
「最高だよね」
「うん」
「毎日聴いてる」
「うん」
「だから悲しくなる」
「うん」
「私ね、もう悲しむのには疲れたの」
「そうか。香奈実は悲しいのか。でも俺は大丈夫。だって心が無いんだもん。悲しみも苦しみも何もないのさ。いいだろ。羨ましいだろ？」
「うん。そうだね。羨ましい」
　私は鹿のぬいぐるみを放り投げた。そして夏祭りで愁にもらったエアガンを手に取り、鹿の頭を撃った。
「ずるいよ。アンタだけ」
　シングルCDのフタを開けた。もういらない。私はCDを半分に割った。
　それをきっかけにして、私は次々にCDを割っていった。CDが割れる度に愁との思い出が失われていくようで、涙が止まらなかった。
「変わらないんだよ。何も変わらないんだよ。田中を問いただしても、これ以上真実を追いかけても、例え全てが分かったとしても何も変わらない。アンタは一生植物人間なんだ。私だけ取り残されたんだ。どうすればいいのよ。ねぇどうすればいいの？　最低だよ。アンタ最低だよ。自分だけ、自分だけ楽になってさあ！」
　手が震える。愁は悪くない。むしろとても不幸だ。でも彼は不幸を感じないし、もう幸せの意味さえ分からない。
　自分が幸福なのか、不幸なのか。それを決めるのは他人じゃない。自分だ。
　ねぇ愁。私はどうしたらいいの？
　疲れ果てて床にへたり込んだ時、部屋のドアが開かれた。げんなり。振り返ると心配そうに私を見つめている両親が居た。
　あぁ。死ね死ね死ね。
　なんなんだよ。見るなよ。

アンタら親は黙って寝てりゃいいんだよ。ボケ。

目を開けると外はもう明るくなっていた。いつの間にか眠っていたらしい。
しばらくぼんやりしてたけど、一階のリビングで両親が何やら話し合っている声が聞こえてきて、とにかく家から出たいと思った。だからさっさとシャワーを浴びて、髪の毛がロクに乾いてないまま家を飛び出した。外はやっぱり暑くて、風呂あがりでさっぱりした体はすぐに汗ばんだ。
行く場所なんてない。今からショッピングを始めたりゲーセンに行ったりしたら私は間違いなく精神異常者だろう。
なんのアテもなくふらふらと朝の忙しない琴似の街を歩いて発寒川までたどり着いた。
土手に座り込んでぼーっと汚い川を眺め続けた。穏やかだった。ただこうやって川の流れを見ているだけの人生も悪くないかもしれない。いやむしろ最高だ。平坦で、希望も絶望も怒りも憎しみもない。人生というのはこうやって穏やかに流れていくべきなのだ。
私はもう私の人生に期待しない。多分これから先の人生で今以上の不幸は訪れないだろう。そしてもちろん人生に華を添えるような事も起きないだろう。ていうか私が幸せを拒むだろう。
そうだ。私はもう幸せを望まない。何も期待しない。
だからこそ、最後に決着はつけておきたい。何が正しくて何が間違ってるのか。それだけはハッキリさせておきたい。中途半端なまま普通な人生を終わらせてだらだらと生き続けるのは嫌だ。
私はもう少しで大人になるんだ。私が悩まなくても苦しまなくても、ごく自然に幸せを手放す時が必ずやってくる。その前に自分の手で決着をつけて幸せを手放すんだ。
私は川に向かって石を思い切りぶん投げた。
「せめて、すっきりしたいよね」

　私は宿木家の前に立っていた。思わず唾を飲み込んだ。ババアのポケットから取り出されたあのナイフ。何をされるか分からない。だからこっちもそれなりの覚悟を持たなきゃいけない。
　ドアノブに手をかけると、ドアはすんなりと開いた。無用心だ。
　玄関には小さなローファーが置いてあって、それがなんとなく気になったけど、私は玄関のすぐ近くにあるドアを開けた。部屋はリビングで、ソファーにはババアが寝転がっていた。テレビで流れている退屈そうな昼ドラが目に入った。
　ババアは驚きのあまり金魚のように口をパクパクさせて私を見ていた。千円くらいで買ったようなボロいジーパンにTシャツという格好。どこにでもいる暇を持て余した専業主婦にしか見えないけど、こいつの頭のネジは一本残らず外れている。
　私は手に握っていたカッターの刃を出してババアに突進した。ババアは慌てて起き上がったけど、テーブルにぶつかって派手に転倒した。
　私は倒れているババアの側に座り込んで、カッターを額に軽く突き刺した。ババアは目と口を限界まで開いて喚き散らした。
「うるさいなぁ……」
　このうるさいババアを黙らせるために、私はポケットからライターを取り出して火をつけて、勢い良く鼻に当てた。聞いたことのない悲鳴が耳を突き刺した。不幸を知らない人間はいつでもよく吠える。
「おばさーん。おとなしくしてくれるー？　騒いだらまた鼻燃やすよー？」
　ババアは打ち上げられた魚のように体を痙攣させながら、首を何度も縦に振った。私は醜いババアを見下ろしながら質問をした。
「私はね、真実を知ってすっきりしたいだけなの。ねぇ、なんであんなビラ配ったの？　根拠も無しにビラ配った訳じゃないでしょ」
「あ、明石愁が殺人者だからよー！」
　話にならん。
「じゃあ質問変えるね。なんで優奈が自殺したのか。心当たりはある？」
「明石愁が悪いのよー！」
「……そういえば優奈って父親ともなんかトラブル起こしてたんだって？　どんなトラブル？」
　ババアは突然おとなしくなった。
「トラブルなんかじゃないわよ。アンタこそ何言ってるの？　でもそうね。優奈はトラブルだと思ってたのかもしれないわ。あのね、私の夫は明石愁を車で轢いたの。優奈はその事について凄く怒ってたわ」
「……は？」
　思考が停止した。
　優奈の父親が、明石愁を轢いた？
　なにそれ。
　なにそれ。
　意味分かんない。
　私の混乱をよそに、ババアは話を続けた。
「だってね、優奈ちゃんは明石愁のせいでずっと悩んでたのよ。毎日暗くて、ずっと家に引きこもって。明石愁に謝る方法を考えてたの。それってつまり、明石愁のせいで優奈ちゃんが落ち込んでたって事でしょ？」
「な、なに言って……」
「そりゃ私と夫は明石愁を憎んだわ。明石愁のせいで優奈ちゃんがあんな状態になって。だから夫はね、明石愁を車で轢いてやったの。仕返しよ仕返し。別に悪い事じゃないでしょ？　それに明石愁が居なくなれば優奈は救われると思ったのよ」
　頭が破裂しそうだった。私の理解できる範囲から飛び出した奴が目の前にいる。その事実は私を強く混乱させた。

「でも最近の子供ってやっぱりよく分からないわ。明石愁は死ななかったけど、植物人間になったんだから死んだも同然でしょ？　てっきりトラブルの相手が死んだから優奈は悩む必要が無くなって立ち直れると思ってたの。それなのにね、優奈は元気にならなかった。それどころか夫に向かって怒鳴ったのよ。人殺し！　てめぇいつか絶対ぶっ殺してやる！　お前なんて親じゃない！　ってね」
　ババアは深い溜息をついた。
「やっぱりちゃんと殺すべきだったんだわ。何度も何度も明石愁の体を車で潰してね。明石愁をこの世界から抹消すればきっと優奈は悩みから解放されたに違いないもの」
　気づいたら、私はババアに馬乗りになって腹を思い切り突き刺していた。
　また断末魔が響いた。
　シャツの下で血が広がっていくのが分かった。笑いが止まらなかった。
　殺してやる。
　絶対に殺してやる。
　もう一度腹を突き刺した。血が広がりTシャツに染みていく。
　ただ普通に生きていただけなのに。
　いじめられて。
　車に轢かれて。
　で、なに？　ちゃんと殺せばよかった？　意味不明。
　なんでだよ。なんで愁はいじめられなきゃいけなかったの。殺されなきゃいけなかったの。
「ぜってーゆるさねー……。ぜってーゆるさねー……」
「や、やめて。やめてちょうだい。やめて。やめてよ……。あ、アンタ人を殺すつもり？」
　なんだこいつ。
　どうして嫌がるんだよ。
　なんだよ。まるで愁は人間じゃないから殺してもいい。でも自分は人間だから殺しちゃダメ。愁を殺しても罪にならないけど自分を殺せば罪になる。そう言ってるようにしか聞こえない。
「ねぇ本当にやめて。やめてちょうだいよ……」
　もう自分を抑える事は不可能だった。
「てめぇぶっ殺さねぇと落ち着いて飯も食えねぇんだよ！」
　次は腕を突き刺した。血がじわっと広がる。
　ババアは恐怖の眼差しで私を見つめながら絶叫した。
　目がうざかった。このババアの怯えた目がうざかった。
　私はスカートのポケットからエアガンを取り出した。もちろん夏祭りに愁からもらった物だ。
　わめき散らすババアの口に銃口を向けると、ババアは目と口をきつく閉じた。
「……バカじゃないの？」
　閉じられた目に銃口を押し当てながら撃鉄を起こして、私は引き金を引いた。
　乾いた音がした直後にババアは異常的なまでに叫んだ。
　狂気的な叫び声を聞いても、私は攻撃の手を緩めなかった。続けて口の中にも弾を二発打ち込んだ。オモチャの弾とはいえ、零距離で撃ち込まれたらとてつもない痛みが走るだろう。
　もっと痛みつけてやる。苦しませてやる。
　愁はこの神経がイカれたババアと父親のせいで植物人間になったんだ。いじめられて、精神的に追い詰められて、まだ二十年も生きてないのに人生を終わらせられたんだ。
　許される訳ないじゃないか。どうして愁があんな状態になって、こいつはのうのうと生きてるんだ。被害者面してるんだ。
　やっぱり私は殺人者になるかしかない。
　愁の人生が理不尽に終わってしまったのなら、彼女である私も理不尽に人生を終わらせるべきじゃないだろうか。
　このババアを殺す事が、私が愁を大好きだった事の証で、私が心のある人間であるという証で、私が私である事の証で、私が世の中ってもんを受け入れられる唯一の方法なんじゃないか？

「おい香奈実！」
　振り返ると、リビングのドアの前に明日菜ちゃんと由梨絵ちゃんが立っていた。
「……な、なんでここに？」
　由梨絵ちゃんが肩で息をしながら言った。
「海藤が……。香奈実が優奈の家に入るのを見たって言ってたから……」
　由梨絵ちゃんが言い終わると、明日菜ちゃんが私を羽交い絞めにしてきた。
「香奈実。アンタこれ以上やったらマジで……」
　私は肘で明日菜ちゃんの顔を打った。明日菜ちゃんは声も出さずにかがみこんだ。手で鼻を覆う。鼻血が出ていた。
　私は躊躇する事なくカッターをババアの腹に突き立てた。今回は結構な量の血が吹き出した。
　頬の筋肉が震えて、なんだか笑えてきた。
「待っててね愁。今こいつ殺してあげるからね。大丈夫だからね。私はちゃんと愁の事が大好きだよ。ねぇ愁。分かるよね。私まだ十八歳なの。何もしないまま大人になったら、私は愁の事忘れて他の男を好きになるかもしれない。いやそんな事ありえないと思うよ。私が愁以外の男を好きになるなんてありえないよ。でもね、可能性はゼロじゃない。人はそんなに強くないの。でも私は強い人間のままでいたいんだ」
　明日菜ちゃんと由梨絵ちゃんが必死に私を引き離そうとしてきたけど、私はババアの髪を掴んで離れなかった。
「愁。私はね、怖いんだ。今はこんなに愁の事が大好きなのに、いつか愁の事を忘れちゃうような気がして怖いんだ。そうだ。分かったよ愁。私は色んな事が怖いんだ。いつか恐怖に打ち負かされて、幸せが欲しくなって、だから愁を忘れて他の男を好きになって現実逃避するかもしれない。頭を空っぽにするかもしれない。ねぇ愁。嫌だよ。そんなの嫌だよ」
　ババアはもがき苦しみ、両手で私の顔面を何度も殴ってきて、ついには指を口の中に突っ込んできた。
「きたねぇ指突っ込んでんじゃねぇよ！」
　カッターを力強く振り上げて、そして。
　思い切り振り下ろした。
　でも。
　私はその瞬間、床に倒れていた。頭に強い衝撃があって、一瞬何が起きたのか分からなかった。
　でもすぐに、明日菜ちゃんに殴られたのだと分かった。明日菜ちゃんは私を睨みつけて、見下ろしていた。
「アンタの悲しみなんか私には想像できないよ。でもね、アンタは私の友達だからね。悪いけど友達を殺人者にするつもりはないんだ」
　明日菜ちゃんはカッターを拾って壁に投げつけた。その時、由梨絵ちゃんが訝しげな表情をしながら天井を見上げた。
「いま、なんか音しなかった？」
「え……」
　由梨絵ちゃんは一目散に部屋を飛び出して階段を駆け上がって行った。明日菜ちゃんも走りだそうと足を伸ばしたけど、ぴたりと姿勢を固めた。多分、今ここで自分が離れたら私がババアを殺してしまうだろうと悟ったに違いない。
　やがて二階から由梨絵ちゃんの悲鳴が聞こえてきた。思わず私が階段を駆け上がると、明日菜ちゃんも血相をかかえてついてきた。ババアは追いかけてくる様子は見せず、ただひたすらにリビングで悲鳴をあげていた。
　二階に上がってドアが開いている部屋に入ると、由梨絵ちゃんが押入れの扉の目の前に立っていた。
　私達三人は黙り込んだ。押入れから音が聞こえるのだ。
　がたごと。
　がたごと。
　そして、かすれた声。
　タスケテ。
　私にはそう聞こえた。
　由梨絵ちゃんが勢い良く押入れの扉を開いた。中には両手両足と胴体をロープで何重にも縛り付けられている少女が入っていた。体中は傷だらけで腕や手や背中、至る所にロープで縛り付けたような跡がある。口にはガムテープが何枚も貼ってあった。

　そして、彼女は全裸だった。
　私達は急いで少女を床に降ろして、由梨絵ちゃんが慎重にガムテープを全部はがした。すると口の中からポロリと白い塊が落ちた。それは丸められた靴下だった。
「おい、玲菜。喋れるか？」
　心臓が弾んだ。この子が玲菜ちゃん……。
　由梨絵ちゃんが優しく話しかけると、玲菜ちゃんはかすれた声を出した。
「みず……」
「明日菜！」
　由梨絵ちゃんが叫ぶと、明日菜ちゃんは慌てて一階に駆け下りて、すぐに水が入ったコップを持ってきて玲菜ちゃんの口に当てた。
　玲菜ちゃんが必死の形相で水を飲んでいる様子を見て、私はハッとしてリビングに戻った。そしてババアを無視してカッターを拾い、台所にある冷蔵庫の扉を開けた。そして中に入っている板チョコとプリンと、大量のロースハムとカニ玉を持って玲菜ちゃんの部屋に駆け込んだ。
　コップの水は空っぽになっていて、玲菜ちゃんは肩で息をしていた。
「い、いま切ってあげるからね」
　私はカッターでロープを切ろうとしたけど、ロープが太すぎてなかなか切れなかった。
「ああ！　どんくせぇなぁ！」
　由梨絵ちゃんは私からカッターを奪い、力強くカッターを動かしてロープを全て切断した。私が板チョコを差し出すと、玲菜ちゃんは腹を空かせたライオンのように板チョコにむしゃぶりついた。むせ込みながらあっという間に食べ終えて、ロースハムとカニ玉もすぐに平らげた。そして次はじっとプリンを凝視し始めた。
「あ、ごめん。スプーン忘れた……」
　私はスプーンを取りに行こうとしたけど、玲菜ちゃんはおもむろにプリンの封をあけて、手をスプーンの代わりにしてプリンを食べ始めた。その姿は鬼気迫るものがあった。指でプリンをすくって口の中に運ぶ。手はベタベタ。口のまわりもベタベタ。裸の体には食べかすがいっぱい落ちている。手からプリンが落ちると拾って口の中に運ぶ。玲菜ちゃんがどれほどの極限状態に陥っていたのか、彼女の様子を見るだけで理解できた。
　プリンを食べ終えると、玲菜ちゃんは床に倒れ込んだ。
「ありがとう……」
　ハンカチが無かったから私は自分の上着を脱いで玲菜ちゃんの口元を丹念にぬぐった。玲菜ちゃんの目はうつろで、天井を見つめているように見えるけど実際は空を見ているような感じだった。
「あのババアは……？」
　私は静かに答えた。
「リビングでぶっ倒れてる」
「連れてって……」
「は？」
「全部話したいから連れてって……。ていうか、ここに居たくない……」
　私達はすぐに動いた。由梨絵ちゃんはクローゼットから下着とTシャツとスカートを引っ張りだしてきて玲菜ちゃんに着せ始めた。私と明日菜ちゃんは玲菜ちゃんの体から外したロープを持ってリビングへ行った。
　ババアはまだ倒れていた。なんかぶつぶつ呟いてる。
　今、こいつに何かされたら困る。このタイミングで警察や学校に連絡されたら面倒だ。
　私はおもむろにババアのお腹の上に飛び乗った。明日菜ちゃんはババアの顔の前に座り込み、両手をしっかりと押さえつけた。私は暴れ狂うババアと格闘しながらロープで両手首をしばった。そして胴体と両足も縛り終えると、一番長いロープの先端をテレビ台のキャスターに頑丈に結びつけた。そしてもう片方の先端をババアの右足の足首に結びつけた。
「……まだ足りないかな」
　私はもう一本のロープを重厚なテーブルの足に結びつけて、もう片方の先端は右手の手首に結びつけた。
　テーブルは部屋の中央、テレビは壁際に置いてあり、ババアはテーブルとテレビの間に倒れている状態だ。足はテレ

ビの方を向いていて、頭はテーブルの方を向いている。これならあがいてもテーブルとテレビの間で太った金魚みたいな踊りをする事しかできないだろう。
　これでしばらくは部屋から出られないし電話をかける事もできないだろうけど、念のため、電話機とテーブルに置いてあった携帯電話は床に叩きつけて壊しておいた。
　リビングから出ると、丁度玲菜ちゃんをおんぶした由梨絵ちゃんが階段から降りてくるところだった。由梨絵ちゃんは疲れきった笑顔で言った。
「電話でタクシー呼んどいた」
　早くここから逃げよう。
　そうしないと、マジで脳みそが破裂しそうだった。

　私達は玲菜ちゃんの家から一番近かった由梨絵ちゃんの家に行った。両親は仕事でいなかったので、まず玲菜ちゃんをお風呂に入れて体を洗ってあげた。玲菜ちゃんは恥ずかしがる素振りは全く見せなかった。
　お風呂からあがった後は由梨絵ちゃんの部屋でコンビニ弁当やジュースを食べさせた。この時点で玲菜ちゃんの顔色は大分良くなっていて、若干発音が悪かったり途中で噛んだりはするけど、なんとか喋れるようにもなってきた。
　どうしてあんな所に閉じ込められてたの？　そう聞こうとした時、玲菜ちゃんがお弁当の容器に箸を置いて、ゆっくりと頭を下げた。
「ごめんなさい」
「え？」
「私知ってるんです。あの、椎本香奈実さんですよね。明石愁さんの彼氏の。……その、えっと。私のお父さんが……」
　愁はこいつの父親の手によって植物人間にされてしまった。腕が震えて、いっそこいつの首をしめてやりたいと思った。でも出来ない。この子は悪くない。
「うん。知ってる」
　私の口から出た声は恐ろしいくらいに穏やかった。どうしてだろうか。未だに真実を否定しているからだろうか？
「あの、お姉ちゃんの事も知ってるんですか？」
「私の彼氏をいじめた。その事で悩んでた」
　玲菜の頬がぴくっと震えた。
「……そうです。それで、お父さんとお母さんが……」
　玲菜がそう言いかけたところで、明日菜ちゃんが床に転がっていたぬいぐるみを壁に投げつけた。
「うちの娘は悪くないですぅ。悪いのは全部明石愁ですぅ。ってほざきだしたんだろ。アンタらすごいね。キチガイの親二人の間に生まれたのに脳みそはまともだ。突然変異？」
　玲菜ちゃんは傷ついた様子などなく、それどころか自嘲気味に笑った。
「まともなんかじゃないですよ。……で、なんていうか。やっぱりお姉ちゃんずっと悩んでて。結構家に引きこもるようになっちゃって。それでお父さんが、明石愁さえいなくなればお姉ちゃんは元気になれると思ったらしいです。だから、明石愁を殺そうとしました」
　激痛が走った。ずっと両手でつねっていた太ももから血が出てきた。
　あぁ、爪伸ばしてたんだ。そんな事がまず頭の中に浮かんで、鼻の奥が熱くなってる事に気づいて、でも泣くのが嫌で泣くのを我慢してたら息をするのが苦しくなってきて、体中の細胞が爆発しそうだった。
　私の大切な彼氏は何もしてないのにいじめられて、自分をいじめた人に勝手に謝られて落ち込まれて、殺されかけて、植物人間になって人生終わらされて。
　そんなのないよ。おかしいよ。絶対にありえない。
「……ねぇ、どうして黙ってたの？」
「ほ、本当はすぐに警察に連絡したかった。でも……」
「でも、なに？　くだらない理由だったら殺すよ」
　玲菜は肩をすくめて、弱々しく言った。
「もしも私がお父さんを警察に引き渡せば、うちの家計は崩壊します。私は平和と普通の生活を終わらせるのが嫌だったんです」
「……」
　私はしばらく黙り込んだ。そんな理由か。そんなくだらない理由なのかよ。
　いや普通に考えたらくだらない理由ではない。父親が逮捕されればもちろん収入は無くなる。学校に行けなくなるかもしれない。少なくともあのキチガイババアと娘で毎日バイトの生活に明け暮れて過ごすような地獄が待っているのは間違いない。
　毎日学校に行って友達とくだらない話をして、放課後は友達とどこかに遊びに行って、帰って来て漫画を読んで寝る。そういう当たり前の生活が失われる。同い年の友達が学校で授業を受けたり放課後に遊んでいる間、ひたすらバイト

に明け暮れる。それは地獄じゃないだろうか。完全なる人生からのドロップアウトじゃないだろうか？　もしも私が玲菜の立場だったら、私は間違いなく黙っていただろう。自分の平穏な生活を守るために全力になる。大切なのは自分の幸せなんだ。
　楽しむのは自分だ。笑うのは自分だ。平和な生活をするのは自分だ。他人じゃない。他人の人生なんて自分にとっては道端に生えてる雑草と同じくらいの存在価値しかないんだ。
　じゃあ私はどうすればいい？　そうか、そうだったんだね。しょうがないね。玲菜ちゃんは悪くないよ。それで済ませろっていうの？
　そんなの、絶対無理。
「ねぇ玲菜ちゃん。若い子がいじめに耐えかねて自殺しましたーみたいなニュース見たらどう思う？」
「……可哀想だと思います」
「そうだね可哀想だね。貴方は世間の中にうまく溶け込んでる」
「え？」
「世間は被害者とか遺族に対して、ひと通り可哀想だっていう感情表現をしたらさっさと次のニュースへ行くの。分かるでしょ。理不尽な仕打ちをうけた人たちは必ず忘れ去られる。泣き寝入りするしかないんだ」
「……はい」
「でもね玲菜ちゃん。私は泣き寝入りするようなヤワな女じゃないんだよ。ごめんね」
　私はスカートのポケットからICレコーダーを取り出した。玲菜ちゃんの顔に絶望が浮かんだ。
「玲菜ちゃんが自分の生活を守ったように、私も自分の生活を守りたいんだ。言わなくても分かるよね。私はこの事件に決着をつけない限り普通じゃいられない」
　明日菜ちゃんと由梨絵ちゃんは何も言わず、私の手に握られているICレコーダーを見つめていた。玲菜ちゃんはがっくりと首を垂れて、多分色んな事を諦めたんだろう。彼女は小さく笑った。
　しばらく沈黙が続いた。玲菜ちゃんは多分、今後の地獄を想像して絶望している事だろう。でも素晴らしい事に、お願いします黙ってて下さいと懇願してくる事はなかった。
　やがて明日菜ちゃんが沈黙を破った。
「……で、なんでアンタは閉じ込められてたの？」
「それは……。えっと、お母さんがあのビラを配りだしたから、私はそんな事は止めてほしいって言ったんです」
「それでやめるババアじゃないよね」
　明日菜ちゃんがため息まじりに言った。玲菜ちゃんは相槌を打って話を続けた。
「私、疲れてました。お姉ちゃん死んじゃうし、お父さんは犯罪者だし、お母さんはあんなビラ配ってるし。でもお父さんを告発したら私の人生は終わっちゃう。だから、私、部屋で自殺しようとしました」
「自殺したり後追い自殺したり人轢いたり。随分と野性的な家族だね」
　明日菜ちゃんの嫌味に対して、玲菜は一瞬だけ眉を大きく動かしたけど、また自嘲気味に笑った。
「そうですね……。一家揃って狂ってるのかもしれません」
「でもアンタ、生きてるよね？」
「はい。その……。私が部屋でナイフを首に当ててる時、お母さんが部屋に入ってきたんです。お母さんが出かけてる時にやったんですけど、案外早く帰って来て……」
　玲菜は深く息を吐いて、話を続けた。
「そしてお母さんは私を押入れに閉じ込めました。私の命を守るために。私が自殺しないように。ご飯を全然与えてくれなかったのは、私に生きる希望を芽生えさせるためです。人間は極限の状態になればなるほど生きたいと願いますから」
「貴方は生きたいと思った？」
　私の質問に玲菜はすぐには答えられなかったけど、やがてハッキリとした口調で言った。
「……少なくとも、もう自殺する気はありません」
　玲菜は途端に顔をくしゃっとさせたけど、懸命に泣くのをこらえて拳をにぎりしめた。
　もう何も聞くことはない。
　全ては愁をいじめていた奴ら全員と、イカれた二人の大人が悪いのだ。

　私は立ち上がって玲菜を見下ろした。
「……アンタ、もう帰って」

　玲菜を家から追い払った後、私達はしばらく黙りこんで物思いにふけっていた。
　ICレコーダーに録音された音声を証拠として、玲菜の父親を警察に突き出せば事件は終了だ。優奈が死んだ理由は分かった。愁の事も全部知る事ができた。もう何も考える必要はない。
　でも。
　私は玲菜の父親を警察に突き出せばそれで満足するのだろうか。
　満足する訳がない。玲菜の父親を刑務所にぶちこもうが半殺しにしようが、私の心にある憎しみと悲しみが消える事はない。圧倒的な憎しみと悲しみは永遠に終わらないんだ。
　だからといって、玲菜の父親を警察に突き出さないままにしておく訳にもいかない。愁を植物人間にしやがった人間がのうのうと平和に生きてるなんて許せない。
　だけど。
　でも玲菜は……。
「ねぇ明日菜ちゃん」
「え？」
　指で床に何やら絵を描いていた明日菜ちゃんはガバっと首をあげた。
「なに？」
「将来の夢は？」
「え……。イラストレーターだけど……」
「フリーの？」
「いや、ゲーム会社とかアプリ作ってる会社とかさ、そういう所で絵描きたいなって思ってる。秋になったら就職活動さ」
「どんな絵描くの？」
「会社とか仕事にもよるけど……。ドット絵とか、ゲームのキャラクターのイラストとか」
「ふぅん。由梨絵ちゃんは？」
　由梨絵ちゃんは手で弄んでいたペットボトルを床に置いて、ハッキリとした口調で答えた。
「ゲーム会社のディレクター」
「なんで？」
「なんでって……。企画を考えるのが好きなんだ。誰も考えたことのないアイディアで製品作ったりさ」
「楽しそうだね」
「うん。あと、土台を作るのが大好きなんだ」
「土台って？」
「人間ってさ、誰かが作った土台の上であたふた歩きまわってるだけだろ」
「うん」
「そういうの、嫌なんだ。私は自分が作った土台で歩きたい。それに」
「うん」
「誰かが作った土台をさ、あたかも自分が作ったかのように錯覚してるような奴らもいるんだ。人の物を奪ってぬるま湯に浸かって毎日ニタニタ笑ってる。私はそういう奴らから土台を守りたいんだ」
「熱いね」
「特別さ」
「そういうアンタはどうなの？」
　と、明日菜ちゃんがぶっきらぼうな口調で聞いてきた。
「学校の先生」
　二人は思い切り吹き出した。そして由梨絵ちゃんが目を見開きながら言った。
「いやいや。初耳なんだけど」

「うん。いま決めた。私は学校の先生になる」
「……なんで？」
「守るんだ。子供を」
「……熱いね」
「特別よ」
　私はともかく二人は夢を持っている。当たり前だ。私達はまだ十八歳なんだから。
　そう。私達の人生は嫌でもまだまだ続いていく。二人は高卒で就職する予定だから、会社に採用されれば学生生活は十八年間で終了という事になる。私達はもう少しで大人になる。
　でも玲菜は違う。あの子にはまだ学生生活を過ごす時間が沢山残ってる。だってあの子はまだ中学生なんだ。私達のように夢や未来を語るにはまだちょっと早すぎる。中学生なんか自分で金を稼げる年でもない。ただ学校と家を往復するだけの毎日で、親から与えられたお小遣いだけで好きなもの買って、親から与えられた飯食って、親の家で暮らしているだけの存在だ。
　まだ何も出来ない子供。何も知らない子供。まだまだ無知で未熟な年頃。
　これからなんだ。玲菜の人生はこれから始まるんだ。
　でも私は、人生が始まってもいない子供の人生を終わらせようとしている。
「……ねぇ、悪いのは宿木の母親と父親だよね」
　二人は無言で頷いた。
「もしも愁が車に轢かれてなくて、愁が優奈の事を許していたら……。私は優奈の事を許したと思う」
　私は鼻水を手の甲でぬぐった。
「優奈は完全な被害者ではないけど……。それでも優奈は被害者だ。もちろん玲菜も愁も被害者なんだよ」
　言葉はとめどなく口から吐き出されていく。
「みんな被害者なんだ。玲菜は可哀想だよね。お姉ちゃん自殺して、父親は殺人未遂なんかやらかして、母親に監禁されて」
　私は由梨絵ちゃんの胸ぐらを両手でつかんだ。
「ねぇ、それで父親が刑務所にぶちこまれてさ、家が崩壊してさ、学校にも行けなくなるなんてあんまりじゃない！？
　可哀想にもほどがあるよね？　いや絶対可哀想だよ。私よりも可哀想だよ。だってさ、確かに私の彼氏はあぁなったけど、私自身は無事だもん。でも玲菜はさ、家族がさ、お姉ちゃんが死んでるんだよ。それで両親揃ってラリってんだよ。絶対私より不幸だよ」
「香奈実……」
「分かった。分かったよ私。どうしようもないんだ。理不尽な事って本当にどうしようもないんだ。そうなんだ」
　私は由梨絵ちゃんからペットボトルを奪い取ってキャップを開けた。そしてICレコーダーからSDカードを取り出した。このSDカードに音声が記録されているのだ。
「おい、お前……」
　由梨絵ちゃんが心配そうに私を見つめてきた。それに構わず私はSDカードをペットボトルの中に投げ入れた。そしてペットボトルから出して、床に転がっていたボールペンで端子の部分をめちゃくちゃに引っ掻いた。試しにICレコーダーにSDカードを入れてみたけどデータは読み込めなくなっていた。
　明日菜ちゃんと由梨絵ちゃんが唾を飲み込むのが分かった。
「……だってさ、大人に苦しめられた子供にさ、とどめを刺すなんてあんまりじゃない。べつに玲菜の父親を刑務所にぶち込んだって私の気は晴れないよ。愁も戻ってこない。結局さ、それが全てなんだよ。でも」
　私は頬を伝う涙を何度も手で拭いながら、言った。
「私はヤワじゃない。自分が思ってること、死ぬまで世間に訴え続けるんだ」
　愁の無念を。
　優奈と玲菜の苦しみを。
　狂った親の存在を。
　何もかも、世間に忘れさせない。幸せなニュースなんて消えてなくなれ。
　子供に伝えるんだ。世間は狂っているという事を。大勢の人たちは少数の人たちの悲しみを葬り去って、都合の良い事

だけを頭に入れているんだと。
　なにより、愁みたいな人間がいたって事を。
　何度も何度も伝えて、そして。
　負けるなと。私は言いたい。

　久しぶりに病院に来たけど、愁の病室には誰もいなかった。
「あれ……」
　ベッドの前に置いてある小さなテレビ台の引き出しは開けっ放しになっていて、覗いてみると中身は空っぽだった。
　窓は開いていてカーテンがゆらゆら揺れている。確か窓の下は中庭になっていたはずだ。
　私は窓の下を覗きこんだ。
「……あ」
　中庭を見下ろした瞬間、私は全ての事を諦めた。そして悩みとか苦しみとか悲しみとか、そういったものが全て崩れ落ちて消えて行く気がした。心の中身が全て抜け落ちて、からっぽになって、穏やかに、安らかになるような気さえした。
「愁……」
　中庭には、血だらけになった愁が倒れていた。

　私は中庭にやってきた。血だらけで変な方向に曲がっている腕を手にとって触ってみたけど、脈はなかった。愁は死んでいた。
　私はしばらく愁を眺めていた。ゆるやかで優しくて、甘い時間だった。悲しいとは思わなかった。
　愁のまわりにはタオルとか歯ブラシセットとか、多分テレビ台の引き出しに入っていたと思われる道具が転がっていた。そして私が誕生日にあげたメモ帳も落ちていた。開いてみるとほとんどのページにぎっしりと文章が書かれていた。ページには日付も書かれていたけど、最後の日付は愁が車に轢かれる前日のものになっていた。
「使ってくれてたんだね……」
　ふと、青色のクリアファイルに視線を奪われた。開いてみると大量のメモ用紙がばらばらと落ちてきた。
「これ……」
　そのメモ用紙は全て、私が書いて愁に渡したものだった。
　明日の待ち合わせ。午後一時。地下鉄琴似駅で。三日後までに貸したノート返してね。
　そんな些細な事が沢山書いてあった。
　そして大量のメモ用紙の中に三枚の便箋が入っている事に気がついた。愁の汚い文字でびっしりと文章が書いてある。
『俺は田中達にいじめられている。宿木優奈にまでいじめられた。彼女は謝ってきたし反省しているみたいだけど、許す気はない。それはともかく、俺はもう田中達のいじめには耐えられない。だからもう自殺しようと思ってる』
『自殺するにあたって未練は一つだけある。それは香奈実ともう一緒にいられないって事だ。俺はもう気が狂うほどに香奈実の事が大好きなんだ。だから香奈実と幸せな時間を過ごす事が出来ないなんて考えただけで涙が出てきそうになる。でも、俺は香奈実と二人で生き続ける事じゃなくて、死んで楽になる道を選んだ』
『香奈実は優しい子だから、きっと俺が死んだ後はずっと悲しみ続けるだろう。だからこそ、香奈実がこの手紙を見つけて読む事を祈りながら言っておく。香奈実。死者に構うな。生きてる奴は生きてる奴同士で何とかしろ。……おっ。なんか俺いまカッコ良いこと言ったなぁ。ってまだ死んでもいないのに何言ってるんだろうな俺。でもまぁ、あれだよ。こうやって自分に酔った文章書く時点で俺はもう終わってるのさ。人間ってのは感傷的になったり自分に酔ったらもう終わりだよ。だってそうだろ？　もうすがる事の出来る人間が自分しかいないんだから。なぁ香奈実。俺の置かれている状況はもう絶望的で、どうにか出来る問題じゃないんだよ』
『さて。俺はもう自殺するけど何も心配する事はないよ。恋愛は一過性のものだと思います。いくら恋人の事を好きだ好きだと想っていても、やがて別れる時がくる。恋愛で傷つく事もある。でも人間は一人じゃ生きていけないから、何度も何度も恋愛で傷ついてもまた恋をするのでしょう。だから香奈実。早く新しい彼氏を見つけて、俺の事は忘れて、幸せに生きてください。明石愁』
　私は便箋を手の中で握りつぶした。
　そして、愁の死体に抱きついた。

「愁。私負けないよ。絶対負けないよ。絶対、アンタが悲しんでた事、世間の奴らに忘れさせないよ。私が、私が伝え続けるからね。愁のこと死なせないよ。ずっとずっと守ってあげるからね。だからね、愁。恋愛は一過性だなんて言わないでよ。私は永遠に愁の事が大好きだよ」
　私の鼻水と涙が愁の顔にぽたぽたと落ちた。
「大好きだよ愁。ずっと大好きだよ。信じてね。信じてくれるよね？」
　私は愁の体に抱きついた。生ぬるい血が顔や服に付着して心地よかった。愁の体から溢れ出ている血を舐めたらなんだか豊かな気持ちになって、心が暖かくなった。愁の血が口の中でじんわりと染み渡って、久しぶりに愁を感じる事が出来たような気がした。
　ずっとこのままでいたいなと思いながら、私はそっと愁の唇にキスをした。

　夏が終わり冬が来て、そして春になった。
　卒業式は涙を流す事なんてなく、淡々と終わった。
　明日菜ちゃんはゲーム会社のイラストレーター。由梨絵ちゃんも同じくゲーム会社のディレクターとして就職した。私は学校の先生になるために大学へ進学する。
　人生が平和であろうとなんだろうと、望んだとしても望んでいなかったとしても、残念ながら私達には未来がある。生きている限り未来が消える事はない。
　私は愁のお墓の前に立ち尽くしていた。愁の葬式には行ってないし、お墓に来たのも始めてだ。葬式に意味なんてない。額縁におさめられた愁の笑顔なんて見たくなかった。石を見て感傷に浸る事もしたくなかった。
　でも今日は特別だ。
「卒業おめでとう」
　私は自分の卒業証書を愁のお墓の前に置いた。
　愁の悲しみは私が一人で全て受け入れる。だから私はもう素直に笑う事はないだろう。例え笑う事があったとしてもそれは上っ面のものだ。私は愁のために笑うことをやめる。そう誓ったんだ。
「おかしな話だね。アンタはちゃんと生きてたのに。悪い事なんにもしてないのに。卒業証書がもらえないんだ。学校を卒業するってさ、どういう事なのかな？」
　私は死ぬまで愁を感じ続ける。憎しみだけを抱いて生きていく。
　癒える事のない私の傷が、少しでも愁の慰めになればいいなと思う。
　私は卒業証書を細かく破いた。卒業証書の欠片は風に乗ってどこかへ飛んでいった。
「愁……」
　私は墓石を優しく撫でた。
「大丈夫。寂しがらなくていいんだよ。……すぐに会いに行くからね」